

ファシリテーター養成プログラム作成のための調査研究

報告書

株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所

令和6（2024）年3月

NTT DATA

株式会社NTTデータ 経営研究所

目次

第 1 章. 調査研究の概要	1
1. 調査の背景・目的	1
2. ファシリテーターの定義と想定場面	1
3. 実施内容	2
4. 実施体制	3
5. スケジュール	3
第 2 章. モデルプログラムの開発に係る検討	4
1. 令和 4 年度調査研究報告書及びモデル事業実施結果の分析	4
2. 文献調査	6
3. ファシリテーター養成方針案	11
(1) 養成方針の論点	11
(2) 養成方針案	11
4. 有識者ヒアリング	14
(1) ヒアリング対象	14
(2) 実施方法	15
(3) ヒアリング結果	15
5. 自治体等へのヒアリング及び取組視察	35
(1) ヒアリング・視察対象	35
(2) 実施方法	35
(3) ヒアリング・視察結果	36
6. ヒアリングを踏まえた養成方針	45
(1) 対象者	45
(2) 想定するファシリテーション場面	46
(3) 主催者	46
(4) こども家庭庁、行政機関、民間事業者の役割分担	46
(5) 講師	47
(6) 研修内容	47
(7) 研修方法	47
(8) 研修後	48
7. 合同ヒアリング	48
(1) 実施方法	48
(2) ヒアリング結果	49
第 3 章. モデルプログラムの開発	52

1. 開発目的	52
2. 想定利用対象.....	53
3. 開発方法・工程	53
4. モデルプログラムの考え方、工夫したポイント	53
第 4 章. 講座実施に必要な教材等の作成.....	58
1. テキスト教材の作成	58
(1) 位置づけ.....	58
(2) 想定対象者・想定する使い方.....	58
(3) 作成方法・工程	58
(4) 基本的な考え方、各項目の狙い、工夫したポイント	58
2. オンデマンド教材（動画）の作成.....	62
(1) 位置づけ.....	62
(2) 想定対象者・想定する使い方.....	62
(3) 作成方法・工程	63
(4) 基本的な考え方、各項目の狙い、工夫したポイント	63
第 5 章. 試行的研修の実施	64
1. 目的	64
2. 実施概要	64
(1) 受講対象	64
(2) 募集方法	65
(3) 実施方法	65
(4) 実施体制	66
3. 実施結果	68
(1) 参加者意見：講座後の振り返り	68
(2) 参加者意見：アンケート.....	71
第 6 章. 試行を踏まえた見直し結果	82
1. 前提	82
2. 論点と対応方針	82
第 7 章. 全国的なこども意見ファシリテーター養成に向けて.....	87
1. 受講者を増やす	87
2. ファシリテーターの質の向上	87
3. 主催者を増やす	88

第1章. 調査研究の概要

1. 調査の背景・目的

令和5年4月に施行された子ども基本法には、すべての子ども及び若者について、その年齢や発達の程度に応じた意見表明の機会や社会的活動に参画する機会を確保すること、子どもや若者の意見を尊重し、その最善の利益を優先して考慮することが基本理念として謳われている。また、同法第11条において、子ども施策を策定、実施、評価する際、子ども及び若者の意見を反映するために必要な措置を講じることを国や地方公共団体に義務づけている。

また、令和5年12月に閣議決定された「子ども大綱」は、その基本的な方針のなかで子ども・若者が権利の主体であることを明示し、子ども施策を推進するために必要な事項として、子ども・若者の社会参画・意見反映を据えている。この子ども大綱を勘案して都道府県は都道府県子ども計画を作成し、市町村は子ども大綱と都道府県子ども計画を勘案して、市町村子ども計画を策定することが、子ども基本法上の努力義務とされている（第10条）。

このような背景から、今後、国や全国の地域の様々な場面で、子どもや若者が自身に関係する施策について意見を聴かれる機会が増えていくことが見込まれる。この中では子ども・若者が意見を言いやすい環境をつくるため、安全で安心な場をつくり、子ども・若者の意見表明をサポートするファシリテーターの役割が重要である。令和4年度に実施された「子ども政策決定過程における子どもの意見反映プロセスの在り方に関する調査研究」（以下、「令和4年度調査研究」という。）において、ファシリテーターは特定の立場を取らない中立的な立ち位置により、子どもや若者が安心して意見を表明するために必要な存在であることが明らかになった一方、令和5年度に実施された「多様な子ども・若者の意見を聴く在り方及び子どもの意見反映に関する行政職員の理解・実践に向けたガイドライン作成のための調査研究」（以下、「令和5年度調査研究」という。）によると、子ども・若者から意見を聴く取組を行っている地方自治体のうち、5割程度が行政職員自らファシリテーターを務めており、ファシリテーター人材を確保することが課題となっている。

そこで、本事業は子ども施策に関して子ども・若者の意見表明や意見反映を支えるファシリテーションについて、必要な知識と実践的な学びの場を提供し、全国的にそのスキルを有した人材（以下、「子ども意見ファシリテーター」という。）を増やしていくことで、子どもや若者にとって安全で安心な意見表明の環境を整備することを目指す。具体的には、今後、全国で行政機関や民間団体等が子どもの意見表明をサポートするファシリテーターを養成する際に活用できるモデルプログラムや教材を作成した。

2. ファシリテーターの定義と想定場面

子ども意見ファシリテーターとは、主に子ども・若者の意見を政策に反映する取組において、子ども・若者が意見を言いやすい環境をつくり、子ども・若者の意見表明をサポートする人材を指す。子ども施策を策定、評価、実施する際、複数の参加者同士の会話を促進し、どのような意見も尊重されるといった安全・安心な場づくりを行う役割を担う。

違う意見や声が大い参加者の存在、緊張等があるなかで中立的な立ち位置により、こども・若者一人ひとりが自信を持って本来の力を発揮して意見を言えることをサポートする、いわばこどもや若者のエンパワメントを担う存在である。

こども基本法第 11 条の意見表明は、こども・若者の意見を政策に反映することを目的としている。このため、こども意見ファシリテーターが活動することが想定される場面は、こども家庭庁による実践のほか、国や地方公共団体等の行政機関が政策を「企画・計画」、「実施」、「評価」する各段階でこども・若者の意見を聴く場面でのファシリテーションである。

具体的には、下記のような場面が想定される。

- **ニーズを聴く**
 - こどもや若者の居場所づくり、相談支援、子育て支援等について、こども・若者の意見を聴く
 - 小学生・中学生のまちづくり委員会にて、町の将来の望ましい姿について意見や希望を聴く
 - こどもの権利について考えるワークショップを行う 等

- **アイデアを募る**
 - 「みんなが笑顔になる遊び場づくり」についてアイデアを考える
 - 「まちづくり」をテーマに、自治体が抱える課題の解決や事業の推進に資する提案を行う 等

- **実現の担い手となる**
 - 児童館の「運営会議」に定期的にこども・若者が参加して児童館の運営に意見を反映する
 - 新しい児童館をつくるにあたって中高生の意見を募集するとともに、児童館の運営に中高生自身が携わり、放課後や休日にイベントの企画や実施に取り組む 等

3. 実施内容

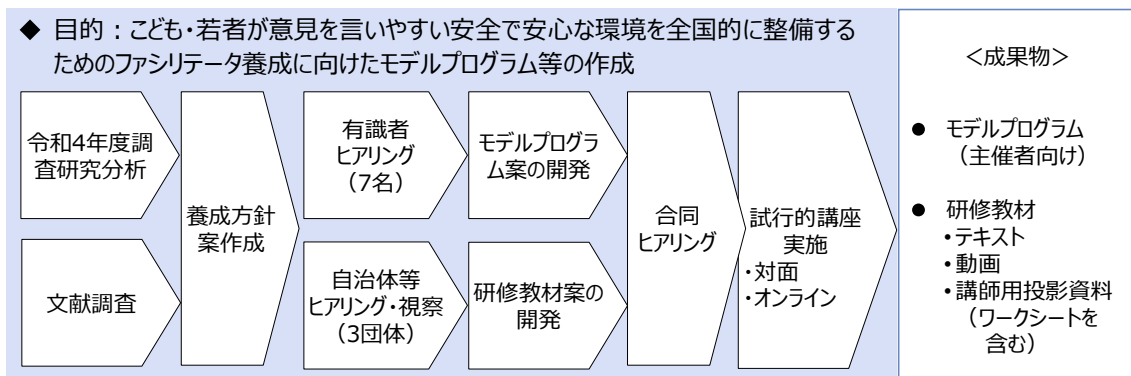
文献調査及びこども家庭庁との議論を踏まえてファシリテーター養成方針の論点整理を行った。当該論点について、有識者及び自治体のヒアリング・視察を行い、モデルプログラム案及び研修用教材案を開発した。ヒアリングをした有識者・自治体担当者に対する合同ヒアリングにおいて、開発したモデルプログラム案及び研修用教材案のα版について意見を聴き、更新したβ版を用いて試行的に養成講座を実施した。受講生の意見を踏まえて、モデルプログラム及び研修用教材案を見直し、第 1 版を作成した。（図表 1-1）

図表 1-1 実施内容

#	実施事項	実施方法
1	令和 4 年度調査研究分析	文献調査
2	養成講座事例調査	文献調査
3	養成方針案作成	#1, #2 の調査及びこども家庭庁との議論

#	実施事項	実施方法
4	有識者ヒアリング	養成講座及び#3 についてヒアリング
5	自治体等ヒアリング・視察	養成講座及び#3 についてヒアリング・視察
6	モデルプログラム案の開発	#4, #5 を踏まえて開発
7	研修教材案の開発	#4, #5 を踏まえて開発
8	合同ヒアリング	#6, #7 について有識者及び自治体等にヒアリング
9	試行的講座実施	#8 を踏まえて更新したモデルプログラム及び教材を用いて研修を試行的に実施（対面、オンライン）

図表 1-2 調査研究の全体像プロセス



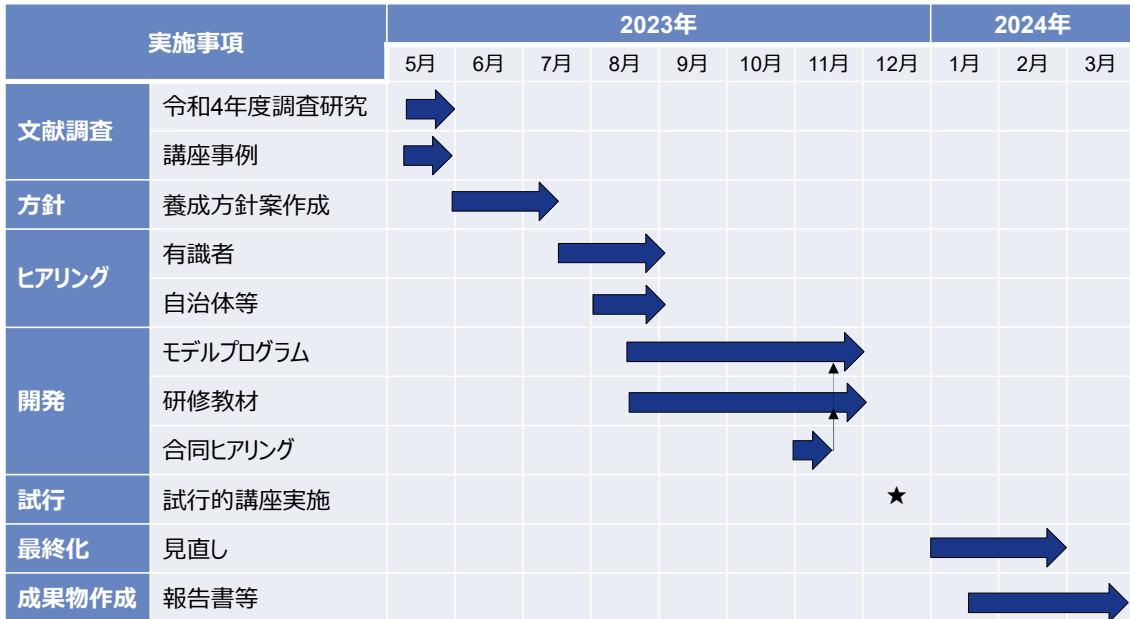
4. 実施体制

本事業は令和4年度調査研究を実施した当社と子ども向けファシリテーターを養成する経験が豊富で、多様な子どもの権利を守る活動に取り組んでいる認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、「FTCJ」という。）に研修教材等作成及び試行的講座の講師・進行を再委託して実施した。

5. スケジュール

文献調査と子ども家庭庁との議論を踏まえて子ども意見ファシリテーターの養成に向けた論点整理と方針を決めた上で、7月中旬から有識者並びに自治体等にヒアリングを実施した。ヒアリング結果を踏まえて養成方針を決め、9月からモデルプログラム並びに研修用教材を作成した（a版）。11月に有識者と自治体職員への合同ヒアリングにてa版について意見を聴いてβ版を作成、12月にファシリテーター養成講座の試行的実施を行い、受講者からのフィードバックを踏まえてモデルプログラム及び教材の見直しを行い、第1版を作成した。

図表 1-3 実施スケジュール



第2章. モデルプログラムの開発に係る検討

1. 令和4年度調査研究報告書及びモデル事業実施結果の分析

令和4年度調査研究で実施した国内先進事例調査、諸外国の取組収集、有識者ヒアリング、モデル事業の参加者の声や評価を分析し、ファシリテーターの必要性や本事業における実施事項を整理した。

令和4年度調査研究		実施事項
ファシリテーターの必要性	<ul style="list-style-type: none"> 政策についての意見を言いたいと言にくいことがある 子ども・若者が意見を言いやすい環境を作るための人材が必要 具体的には声かけで安心感を提供する、公平な発言機会を作る、意見が同じでなくてよいことを伝える、問いかけにより意見を引き出す、発言を評価しないで聴く人材としてファシリテーターが必要 子どもがファシリテーターを決められるような仕組みも検討に値する 	<ul style="list-style-type: none"> ファシリテーション場面とファシリテーターの役割の整理 子ども・若者に対するファシリテーションや政策についての意見表明でファシリテーターとして特に留意すべきことの整理 ファシリテーター養成後の仕組み検討
研修の必要性と内容	<ul style="list-style-type: none"> 子ども・若者の声を聴く、議論を進行する役割の人材は研修を受けている 	<ul style="list-style-type: none"> 必須研修内容の整理 年齢や発達、境遇等

令和4年度調査研究		実施事項
	<ul style="list-style-type: none"> • 研修内容は、こどもの権利や児童の権利に関する条約、こども家庭庁の理念や役割、こども・若者への権利侵害を予防し、安全・安心な活動と運営を図ること（以下、「こどものセーフゲーディング」という。）等の例や意見がある • 心身の障害や背景、家庭環境等が多様なこども・若者が参加することを想定して一定の知識や属性に応じた配慮や対応方法への理解が必要 • ファシリテーションの基本的技術とこども・若者の境遇や困難（例えば障害、外国籍、性的マイノリティ等）について研修を受けていくことが考えられる 	<p>に応じたファシリテーション上の留意点の整理</p>
ファシリテーション技術	<ul style="list-style-type: none"> • オンラインの場での議論をファシリテーションし、安全で安心な空間を作るには対面とは別のトレーニングが必要 • SNSを活用したチャットでの議論は、コアタイムを設けたことで議論が活発化 • SNSを活用したチャットでは、リプライ機能やリアクション機能をファシリテーターが活用したことが参加者にとって意見が受容されたと感じる効果があった 	<ul style="list-style-type: none"> • 事業目的に即した研修内容の検討 • 意見聴取手法（対面、オンライン、チャット等）に応じたファシリテーションの在り方検討
養成する人材	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーターの役割を担う人材として、地域でこども・若者向けの活動をしているNPO法人、プレイヤー、地方自治体職員、市内で活動する大学生や若者、こどもに関する学科で学ぶ大学生、学校の教師、生徒自身等の事例や意見がある 	<ul style="list-style-type: none"> • 想定する受講者の整理 • 経験者の位置づけ検討
ファシリテーションの実施体制	<ul style="list-style-type: none"> • 意見を記録、可視化することで意見が受容されたとこども・若者が感じるため、板書役がファシリテーターを補助する役割を担うとよい • 意見を引き出すファシリテーターや、こども・若者と近い目線・価値観で対応することができるサポーター、意見を表明しにくいこども・若者の意見を聴き取り的確に代弁する者の確保等、意見を言いやすい・意見を聴いてもらえる安全・安心な環境づくりを通じ、こども・若者の心理的安全性を確保することが重要 	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーター以外の体制を考慮した講座主催者向け資料作成
養成の位置づ	<ul style="list-style-type: none"> • 「資格」よりは「研修」とし、講座受講によりファシリ 	<ul style="list-style-type: none"> • フィードバックやスーパ

令和4年度調査研究		実施事項
け、養成後のスキルアップ	<ul style="list-style-type: none"> テーションの現場に出ることが考えられる ・ ども・若者の本音が聴けていたか、公平なファシリテーションができたか等ファシリテーター同士が振り返る場の設定が質の向上のために必要 	ービジョン等、スキルアップのあり方検討

2. 文献調査

前節で整理した実施事項について検討内容や選択肢の参考とするため、ファシリテーター及びファシリテーターに類似する人材（コーディネーター、サポーター、ナビゲーター等）、ども・若者に関わる人材を養成している事例をデスクトップリサーチした。調査項目と主な調査内容は図表 2-1 の通りである。

図表 2-1 調査項目と主な調査内容

調査項目	主な調査内容
実施主体	<ul style="list-style-type: none"> ・国・自治体、民間事業者 ※委託事業か民間事業か ・行政と民間（外部）との役割分担（委託範囲）
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ども等向け、一般向け、他 ・想定されるファシリテーション場面
対象者	<ul style="list-style-type: none"> ・人数 ・専門性の要否（経験者・未経験者） ・経験者の実務経験（ファシリテーション経験、ども・若者向け事業・活動実施経験）
期間	<ul style="list-style-type: none"> ・時間・日数
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・経験者・未経験者別カリキュラムの要否 ・経験者・未経験者共通のカリキュラム ・基礎編、応用編の内容、レベル ・習得レベルと活動条件
教材	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の有無、使用教材名（テキストかビデオ等）
受講形式	<ul style="list-style-type: none"> ・個別型・集合型、座学・実践、対面・オンライン（一方向・双方向）・チャット
受講料	<ul style="list-style-type: none"> ・有料（料金）・無料
講師	<ul style="list-style-type: none"> ・民間団体・国・自治体等（レベル含む）
受講後	<ul style="list-style-type: none"> ・活動支援状況
スキルアップ	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップアップ講座有無、専門分化

調査した講座の概要を以下に示す。

図表 2-2 調査対象講座の概要（講座名称、五十音順）

#	講座名称	実施主体	想定受講者	ファシリテーション対象	受講者要件	受講形態	所要期間
1	子どもアドボケイト養成講座（基礎編）（意見表明支援員）	宮城県（委託：一般社団法人子どもアドボカシーセンターみやぎ）	一般向け	こども世代	以下の要件をすべて満たす方 ・子どもアドボカシーの基礎を学びたい・宮城県内でアドボケイト活動をしたい ・全講座を受講できる（原則） ・宮城県内在住	オンライン（動画、LIVE）	5日
2	子どもアドボケイト養成講座（実践編）（意見表明支援員）	宮城県（委託：一般社団法人子どもアドボカシーセンターみやぎ）	一般向け	こども世代	宮城県内在住及び下記の全講座 3 日間の受講が可能かつ以下の 1.2.いずれかの要件を満たす方 1.（一社）子どもアドボカシーセンターみやぎが主催、もしくは共催する「子どもアドボカシー養成講座（基礎編）」を受講済み 2.1.と同等の養成講座を受講済み いずれの場合も受講証明等（写し）の提出が必要	オンライン対面	3日
3	こども哲学ファシリテーター養成講座初級編	特定非営利活動法人こども哲学・おとな哲学 アーダコーダ	一般向け	こども世代	無	オンライン	2日
4	チャイルド・ファシリテーター講座	石巻市子どもセンター	一般向け	こども世代	子どもの権利、子ども参加に関心のある方。特に子どもと活動することが多い方。	対面	2日

#	講座名称	実施主体	想定受講者	ファシリテーション対象	受講者要件	受講形態	所要期間
5	ファシリテーション基礎講座	特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会	一般向け	全世代	無	対面	1日
6	ファシリテーション研修「次世代リーダー教育インターンシッププログラム」 宿泊型キャンプコース	特定非営利活動法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン	一般向け	こども・若者世代	無	オンライン 対面	3か月
7	ファシリテーション公開講座（実践編）	特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会	一般向け	全世代	ファシリテーション実践者／基礎セミナー受講者 （ファシリテーションを学びたい個人の方で上記の対象者であれば、受講可能。本講座は、当協会の設立趣旨書にある、公益的な活動の一環として開催。このため、ビジネス、社会的、教育の幅広い分野の個人の方々を受講者として想定）	対面	1日
8	ファシリテーター養成講座	一般財団法人 あしなが育英会	一般向け	こども・若者世代	無	対面	2日

#	講座名称	実施主体	想定受講者	ファシリテーション対象	受講者要件	受講形態	所要期間
9	ファミリーサポート提供会員	東京都福祉保健局	一般向け	こども世代	無	対面	—
10	わかもの参画ファシリテーター	NPO 法人わかもののみち	一般向け	若者世代	すでに子どもや若者の参画に関わるワークショップ等に携わられている方・子どもや若者の参画に関心があり、将来的にファシリテーターやコーディネーターになりたい方	対面	1日
11	わくわくナビゲーター養成講座(基礎編)	NPO 法人キーパーソン 21	一般向け	こども・若者世代	<ul style="list-style-type: none"> ・教育に関心がある社会人 ・教育関係者 ・キャリアコンサルタント ・企業の人事・CSR 担当者 ・子育て中の親 (パパ・ママ) 	対面	—
12	わくわくナビゲーター養成講座(応用編)	NPO 法人キーパーソン 21	一般向け	こども・若者世代	<ul style="list-style-type: none"> ・教育に関心がある社会人 ・教育関係者 ・キャリアコンサルタント ・企業の人事・CSR 担当者 ・子育て中の親 (パパ・ママ) 	対面	—
13	教育ファシリテーター養成講座基礎編	NPO 法人みらいず works	一般向け	こども・若者世代	無	対面	—
14	子どもアドボカシー	長崎県	一般向け	こども世代	・福祉系学部、学科に所属し、児童福祉を学ぶ大学	オンライン	5日間

#	講座名称	実施主体	想定受講者	ファシリテーション対象	受講者要件	受講形態	所要期間
	基礎講座	NPO 法人子どもの権利オンブズパーソンながさき			<ul style="list-style-type: none"> 生・大学院生 ・子どもの人権擁護等の活動を行う団体に所属し、要保護児童に対する支援に関する知識を有し、または、活動等を行っている者 ・社会福祉、教育等の専門知識を有し、児童相談に関する支援の経験があること ・子どもの意見表明支援員（アドボケイト）としての活動に協力する 		

3. ファシリテーター養成方針案

(1) 養成方針の論点

令和 4 年度調査研究結果、文献調査及びこども家庭庁との議論を踏まえて、こども意見ファシリテーターを養成するゴール並びに養成方針を決める上での論点を整理した。(図表 2-3)

図表 2-3 ファシリテーター養成方針の論点

- | | |
|---|--|
| <p>1. 対象者</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 求める資質✓ 専門性の可否→経験者、未経験者の双方対象✓ 経験者の実務経験（ファシリテーション経験、こども・若者向け事業・活動実施経験） <p>2. 想定するファシリテーション場面</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 政策・施策立案、実施、評価✓ こども・若者年代別、こども・若者全体、多世代✓ 対面、オンライン、ハイブリッド、チャット、XR✓ 参加者規模（少人数、大人数） <p>3. 主催者</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 国・自治体、民間事業者※委託事業か民間事業か <p>4. こども家庭庁、行政機関、民間事業者の役割分担</p> <p>5. 講師</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 求める資質 | <p>6. 研修内容</p> <ul style="list-style-type: none">✓ 到達目標✓ 経験者・未経験者別カリキュラムの要否✓ 経験者・未経験者共通のカリキュラム✓ 基礎編、応用編（内容、レベル、所要時間）✓ 習得レベルと活動条件 <p>7. 研修方法</p> <ol style="list-style-type: none">1. 個別型、集合型2. 座学、実践3. 一方向（オンデマンド当）、双方向（対面、オンライン、ハイブリッド、XR） <p>8. 教材</p> <p>9. 研修後</p> <ol style="list-style-type: none">1. 活動支援・派遣方法2. スキルアップ・専門分化 |
|---|--|

(2) 養成方針案

主な論点に即して、大枠の養成方針案を作成した。ヒアリング時点で想定していた受講対象者、モデルプログラムの考え方と講座の内容（タイムライン）を示す。

1) 受講対象者

こども意見ファシリテーターの担い手は大きく経験者と未経験者が考えられる。ここでは、①業務・活動を通じて、こども・若者と接している、②政策や制度に関するこども・若者の意見表明・意見反映の場面の業務経験がある、③多様な意見を聴き、意見表明をサポートするファシリテーションの実践経験がある、④ファシリテーションの場の企画・運営経験がある、のすべてを満たす者を「経験者」、①～④のいずれかあるいはまったく経験がない者を「未経験者」として整理した場合、受講対象者を未経験者と想定した。

図表 2-4 受講対象者（ヒアリング時点）

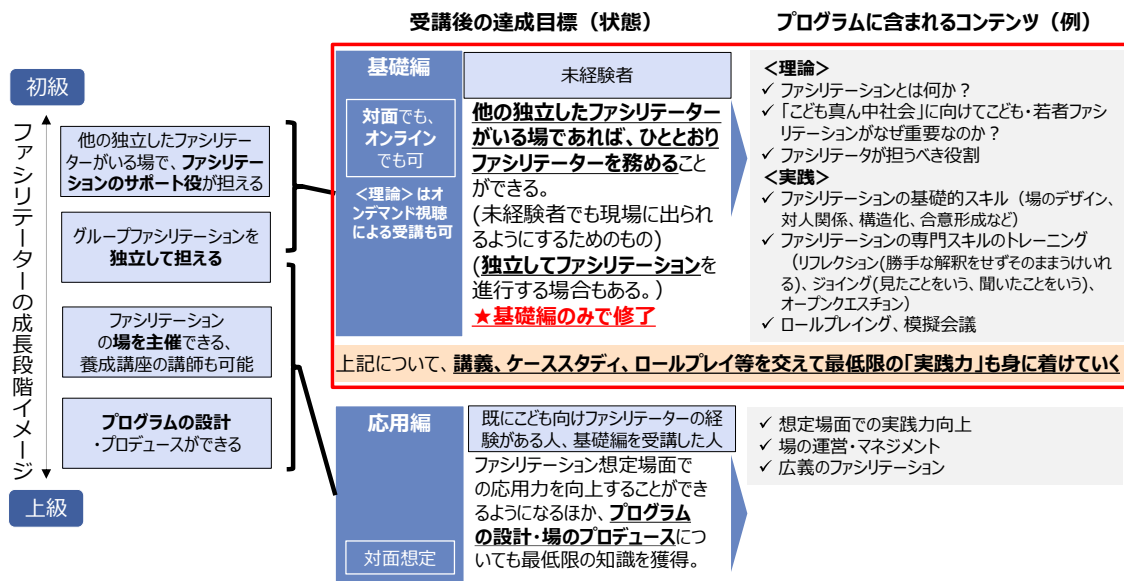
		経験内容	該当例	
経験者	①	業務・活動を通じて、子どもと接している	<ul style="list-style-type: none"> NPOや大学研究室等、子ども若者の権利や子ども若者参画でファシリテーション実践団体及び当該団体の登録ファシリテーター 	受講対象
	②	政策や制度に関する子どもの意見表明・意見反映の場面での業務経験		
③	多様な意見を聴き、引き出すファシリテーションの実践経験			
④	ファシリテーションの場の企画・運営経験			
未経験者	①	上記経験のうちいずれかの経験を持つ	<ul style="list-style-type: none"> 子ども・若者向け活動団体や一般ファシリテーション団体及び登録ファシリテーター、子どもの権利の専門家・アドボケート 学童・児童館・養護施設等の職員、行政職員、子ども・若者向け支援者・地域での活動者やボランティア、教員、大学生、子ども・若者自身 	
	②	上記の経験がない		

2) モデルプログラムの考え方

幅広い層がファシリテーターとして全国的に養成されることを目指し、1日（6～7時間程度）で養成するプログラムを想定した。

ファシリテーターの成長段階を初級から上級まで想定した上で、受講後の達成目標を「他の独立したファシリテーターがいる場であれば、ひととおりファシリテーターを務める」ことを目指すものが「基礎編」、「ファシリテーションの場を主催できる、養成講座の講師も可能」、「プログラムの設計・プロデュースができる」ことを目指す者が「応用編」と位置づけ、モデルプログラムのスコープを基礎編とした。講義とケーススタディで理論を学びつつ、最低限の実践力も身につけられるカリキュラムとすることを想定した。

図表 2-5 モデルプログラムの考え方（ヒアリング時点）



3) 講座内容

1日講座を集合型で行うことを想定し、カリキュラムとタイムラインを検討した。講義、基礎的スキル学習、実践を4割（150分）、2割（75分）、4割（120分）の構成とした。まず、政策プロセスへのこども・若者参画の意義やファシリテーターの役割、意見を聴く手法の特徴を講義形式として学んだ後に、ファシリテーションの基礎スキルであるアクティブラーニング、質問力、進行について講義とワークを繰り返して学習、さらに模擬会議形式でファシリテーターを1人1回体験することで、最低限の実践力を身につける内容とした。

図表 2-6 基礎編講座の内容（ヒアリング時点）

	時間配分	項目	内容（一部）	実施方法
基礎編 (前半) (約2.5時間)	20分	イントロダクション	・ 本講座のゴール、自己紹介、アイスブレイクなど	－
	15分	こども施策の決定過程における意見聴取に向けて	・ こどもを取り巻く環境とこども基本法、児童の権利、こども家庭庁について ・ 多様なこどもや若者を理解する、こどもや若者の声	講義
	15分	こども・若者参画、エンパワメントに向けて	・ 政策プロセスへのこども・若者参画、こども参画の種類など こども・若者のゆらぎへの寄り添い方、NG集	
	20分	ファシリテーションの定義と概要、必要性	・ なぜ話し合いがうまくいかないのか？（受講者の経験を聴きながら）、ファシリテーションの狭義・広義の定義とは？「こども真ん中社会」に向けてこども・若者ファシリテーションがなぜ重要なのか？	
	10分	ファシリテータが担うべき役割	・ 他者との関係のなかで不安な心理を解消すること、参加者同士の相互作用を生み出すこと、傾聴、観察、介入、質問など・・・	
	10分	休憩		
	30分	ファシリテーションの基礎的スキル	・ 場のデザインのスキル ：場の雰囲気づくり、話し合いの進め方 ・ 対人関係のスキル ：聴くことが安心感、信頼感を与える、質問の使い分け ・ 構造化のスキル ：主張を明確にする、議論の全体像をつかむ、議論を書きとめる など	
	15分	振り返り実践ワーク（4～5人のグループで）	・ 今学んだことをもとに、みんなで話し合ってみましょう。	ワーク
	15分	様々な意見聴取の手法	・ 意見聴取手法の違い（対面、オンライン、チャット）によるファシリテーションのコツや留意点 ・ インクルーシブな意見表明の場を実現するための留意点 等	講義
基礎編 (後半) (約4時間)	30分	ファシリテーションの基礎的スキル	・ 場のデザインのスキル ：場の雰囲気づくり、話し合いの進め方 ・ 対人関係のスキル ：聴くことが安心感、信頼感を与える、質問の使い分け ・ 構造化のスキル ：主張を明確にする、議論の全体像をつかむ、議論を書きとめる など	講義
	15分	基礎的スキル①	・ アクティブリスニングスキル （アイコンタクト・あいづち・パーシング・オウム返しなど）	講義
	10分	基礎的スキル①'	・ アクティブリスニングについて、隣の人と試す	ワーク
	15分	基礎的スキル②	・ 質問力 （質問の種類と意図、チャンクダウン、参加者同士を繋げるなど）	講義
	15分	基礎的スキル③	・ 話し合いの進め方、振り返りのステップ （どのように話を始めるのか、介入、観察の具体的手法、振り返りのステップの重要性、次につなげるための工夫など）	講義
	10分	基礎的スキル②'③'	・ 質問力、話し合いの進め方、振り返りのステップで学習した内容を、隣の人と試す	ワーク
	10分	休憩		
	100分	模擬会議（4～5人）×20分程度×4回 ※途中休憩を適宜入れる。	・ 参加者がこども役を演じて、あるテーマで模擬会議のファシリテーターを1人1回経験。 ・ ホワイトボード等を使って議論の内容を可視化する板書役を別の1人が担う。	演習
	30分	フィードバック	・ 講師から個別にフィードバックをもらうプログラム。また、参加者同士のフィードバックを通じて、ファシリテーターとしての必要なことを学び合い(実践に活かすヒントを持ち帰ってもらう)	

4. 有識者ヒアリング

(1) ヒアリング対象

こども家庭庁によるファシリテーターの養成方針案について意見を聞くため、有識者ヒアリングを実施した。

ヒアリングの対象者は、ファシリテーターに相当する人材を養成している企業・団体で、①【こどもの権利】有識者、②【こども・若者参画】ファシリテーション実践・養成者、③【一般】ファシリテーション実践・養成者、④その他教育プログラム作成・実践者の4つのカテゴリから選定した。

図表 2-7 有識者ヒアリング対象者一覧（カテゴリ別実施日順）

#	カテゴリ	所属	役職	氏名（敬称略）	実施日
1	①【子どもの権利】有識者	公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン	事務局長	高井明子	2023年7月26日
2	②【子ども・若者参画】 ファシリテーション実践・養成者	認定NPO法人 キーパーソン21	代表理事	朝山あつこ	2023年7月14日
3		兵庫県立大学 環境人間学部 ソーシャルメディア研究会	教授 代表理事	竹内和雄	2023年9月8日
4	③【一般】 ファシリテーション実践・養成者	特定非営利活動法人 こども哲学・おとな哲学 アーダコーダ	代表	角田将太郎	2023年7月12日
5		特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会（FAJ）	前会長 理事	竹本記子 山田真司	2023年8月9日
6	④その他教育プログラム作成・実践者	ミテモ株式会社	取締役	飯田一弘	2023年8月21日

（2） 実施方法

有識者それぞれに、①各団体等が養成・開催している人材養成の取組について、②図表 2-3 に示したこども意見ファシリテーターの養成方針の論点について意見を聞いた。

ヒアリングの実施方法はオンライン会議（Teams）で、各 1.5～2 時間である。

（3） ヒアリング結果

ヒアリング対象者が所属している団体が養成・開催している人材養成の取組やこども意見ファシリテーターの養成方針の論点に対する意見を示す。

4） 対象団体の取組

ヒアリング対象者の所属団体の団体概要や取組概要をまとめ、ヒアリングにて調査した人材養成の取組を各団体共通の観点でまとめている。ヒアリングの観点は養成講座の「講座概要」、「構成」、「養成方針」、「カリキュラムや教材」、「講座の提供方法」、「養成後の活動支援とその方法」である。「その他教育プログラム作成・実践者」には、「プログラム作成の方法」についてもヒアリングした。

（ア） 公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）

・ 団体概要¹

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、子どもの権利のパイオニアとして 100 年の歴史を持つ、こども支援専門の国際 NGO である。セーブ・ザ・チルドレンの活動は児童の権利に関する条約（以下、「子どもの権利条約」という。）に基づき、すべて子どもの権利の実現のために行われている。こどもに対して提供する下記のプログラムで活動する人材「チャイルドファシリテーター」を養成している。

¹ セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ホームページ（https://www.savechildren.or.jp/about_sc/kodomono_kenri/index.html）

• 取組概要（養成した人材の活躍の場）

<東日本大震災復興支援事業>²

東北各地で「教育」「こどもの保護」「こどもにやさしい地域づくり」という3本柱のプログラムを実施。さらに、これらのプログラムを横断的に網羅する活動として、小中学校や放課後児童クラブ（学童）等での「防災（災害リスク軽減）」プログラム、東北のこどもに関わる地域のNPOに対する資金提供や基盤強化を行うプログラム「コミュニティー・イニシアチブ」、福島県で原発事故や震災の影響を受けたこどもたちが屋内外で安心して学び、遊べる機会拡大をサポートする「福島プログラム」も展開した。

同プロジェクトで岩手県山田町・陸前高田市、宮城県石巻市で実施される「子どもまちづくりクラブ」において、チャイルドファシリテーターが入り、こどもたちがどんなまちにしたいか、地域の復興について話し合い、「らいつ」（石巻市子どもセンター）や「はびね」（山田町ふれあいセンター※図書館機能と小中高生世代をはじめとするこどもの居場所）、「ミニあかりの木」（陸前高田市）が設立された。同クラブの活動は2011年夏から月数回、数年に及んだ。こどもとの関わりは一時的なものではなく、長期に渡った。そのため体制と大人の準備・行政や地域との調整が必要である。他に単発のヒアリングやイベントでもチャイルドファシリテーターがこどもの意見表明をサポートした。

<子ども・ユースキャラバン>³

2023年4月にこども家庭庁が発足することを踏まえ、2022年7月から12月にかけて、全国4カ所（青森県青森市、愛知県名古屋市、愛媛県松山市、沖縄県那覇市）で、9才から18才までのこどもや若者が、こどもの権利やこども家庭庁の目的と役割について学び、こども政策に関わっている政策決定者と意見交換を行うイベントを開催した。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	<ul style="list-style-type: none"> 復興支援事業及び子ども・ユースキャラバン2022で活動するチャイルドファシリテーター
講座概要	チャイルドファシリテーター養成	<ul style="list-style-type: none"> 復興支援事業（こども参画）のチャイルドファシリテーター：こどもの声を聴いて、復興に反映・実現させるプロジェクトでファシリテーションを担う。 主に大学生が養成対象。養成は「事前準備講座」により実

² 東日本大震災復興支援事業 (<https://www.savechildren.or.jp/scjcms/press.php?d=1894>)

³ 子ども・ユースキャラバン (<https://www.savechildren.or.jp/sp/news/index.php?d=4106>)

		<p>施。各活動日の前に当日の流れと配慮事項の確認を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども・ユースキャラバンのチャイルドファシリテーター：経験者（地域で子どもに関わっている人（キャラバンのための地域のパートナー団体））が対象。いずれかの団体からレファレンスがもらえる人を対象に研修を実施。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> セーブ・ザ・チルドレン職員によるアクティビティを取り入れた研修を実施。 活動はチャイルドファシリテーターとスーパーバイザーの組み合わせで活動する。 活動後に毎回こどもの様子、こどもの発言、チャイルドファシリテーターの関わり等について振り返りを実施。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション、柔軟性、分析力 こどもの権利に理解があって、こどもの話を聞く、こどもの声を尊重する姿勢があること。 こどもが参加者に含まれていることと「意義ある参加」は違うことを理解して尊重できること。 こどもの発達に合わせて言葉を選択・表現することができること。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<ul style="list-style-type: none"> こどもの権利・意見表明、ファシリテーション・ワークショップに精通する専門家からの講義やワークショップ形式の研修等を行う。 「こども観の共有」、「こどもの権利の理解、こどもの意見表明の重要性」、「ファシリテーターとは」、「チャイルドファシリテーターとして必要なことは」等を扱う。
講座の提供方法	個別型/集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> 対面、オンライン双方で実施経験あり。 対面が望ましいが、座学的な内容でスライド提示の内容であればオンラインと混合がよい。 オンラインの場合、画面のみで眠くならないようにワークを入れる、ブレイクアウトルームを回る、ファシリテーションをするときはワークシートを作ってみんなで見るとの工夫をする。 複数回オンラインで研修を実施した後、対面研修とすると盛り上がる。
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の活動ごとにこどもへの声かけや関わりについてスタッフ全員で振り返る。四半期・半年に1回程度、専門家を交えて中期の振り返りを実施。専門家によるファシリテーターへのヒアリングも実施。

- 講座の特徴や考え方

こどもが安全と安心を確保できることを重視しており、受講者がこどもの権利とこどものセーフガーディングを理解することを重視している。また、今後全国的に養成されることに鑑み、養成後に活躍できる場があること、養成後にファシリテーターが抱く「ゆらぎ」を共有し、誰かにスーパーバイズされながら活動できることも大切にしている。

(イ) 認定 NPO 法人キーパーソン 21

- 団体概要⁴

キーパーソン 21 は、2000 年の設立以来、学校、教育施設、企業、行政、地域と連携し、こどもたちが自分を見つめ、今を生き、未来をつくる力の育成に力を注いでいる。一人ひとりの可能性を丁寧に引き出し、自分を活かして生きていけるように、「集団」のキャリア教育から一歩踏み込んだ「個」へのキャリア教育に力を入れている。

このキャリア教育を提供する人材「わくわくナビゲーター」を事前研修の位置づけで養成するプログラムを実施している。また、わくわくナビゲーターの養成とは別に、地域住民を対象に「地域サポーター」を養成している。地域サポーターの養成は、ファシリテーターへの入り口であるだけでなく、キーパーソン 21 の考え方をもちつつ日常的にこどもに関わる大人を地域の中に育むことにつながっている。

- 取組概要（養成した人材の活躍の場）

<夢！自分！発見プログラム>⁵

先生でも保護者でもない社会人との出会いの中で、こどもたちが将来の仕事や生き方を考え、本心に大切にしたいことに気づき、主体的に人生を選択して動き出す力を育む。多数の学校で授業に導入されている教育効果の高いオリジナルのプログラムを展開している。

⁴ キーパーソン 21 ホームページ (<https://www.keyperson21.org/aboutus/mission-vision>)

⁵ キーパーソン 21 ホームページ (<https://www.keyperson21.org/activity/program>)

図表 2-8 夢！自分！発見プログラム一覧

おもしろい仕事人がやってくる	社会人で活躍する大人たちが、多様な生き方や仕事・価値観をありのままに語る。
すきなものビンゴ & お仕事マップ	自分のすきなものと世の中の仕事がつながっていることに気づいてもらい、わくわくする気持ちを引き出すことで、こどもたちの主体性を育む。
コミュニケーションゲーム	初めて出会う大人とのコミュニケーションを通して、「伝える」、「尋ねる」、「お願いをする」の3つの場面を想定して、コミュニケーションの達人を目指す。
かっこいい大人ニュース	インタビュー形式でこどもたちが初めて出会う大人のありのままの生き方を聞き出し、大人を通して社会を身近に感じる。
個別アクションプログラム	具体的な進路や将来について一緒に考え、自立へ向けて一歩を踏み出す意欲を育む。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	<ul style="list-style-type: none"> • わくわくナビゲーター
講座概要	わくわくナビゲーター養成講座について	<ul style="list-style-type: none"> • 学校現場で「夢！自分！発見プログラム」をサポートする人材を育成する。 • 対象者は特に定めなし。受講者の多くは教育に関心がある社会人、教育関係者、キャリアコンサルタント、企業の人事・CSR担当者、子育て中の親等である。 • 参加人数は1回20名程度。 • こどもの、「自分の本心や気持ちが素直に向いて、わくわくして動き出さずにはいられない原動力（わくわくエンジン）」を大人が引き出すことを重視している。 • キーパーソン21のプログラムは、ゲーム形式で楽しく、非日常的な、チームワークが必要な内容である。大人はこどものわくわくエンジンを「引き出し、認め、伴走する」。 • 講座ではこどもの発想をまずは受けとめ、否定するような言葉は使わないよう伝えている。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> • トレーニング①（4級）：プログラムの体験（2～2.5時間）。まずは大人がプログラムの楽しさを知る。 • トレーニング②（3級）：講義と実践（3.5～4時間）。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 講義：考え方や心得（心を開く、関心を持つ、自身を

		<p>持つ)等を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 実践：受講生同士ペアになってわくわくエンジンを引き出す練習をする。 ➤ トレーニング①②の双方を受ければ「サポーター」（プログラムの中でこどもをサポート）になれる。 <ul style="list-style-type: none"> • トレーニング③（2級）：プログラムの司会進行を行うための内容。こどもたちが自分を出しやすくする進行方法について、座学と実践（6時間）。 • 1級：現場を最低3回経験した後で申請し、認定委員会で認定する。 • 講師：講師養成講座を受講し、講師アシスタントの経験を積んだ後、講師認定の申請し、認定委員会で認定する。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> • 相手の心の声を引き出し、相手の心のだ真ん中を見ることが出来る力を備える。 • 誘導したいゴールやエゴを持たず、上下関係のない対等でフラットな状況でいられる。 • 意味のある（意図のある）問いを投げかけることができる。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<p><トレーニング①（4級）></p> <ul style="list-style-type: none"> • 体験2～2.5時間（プログラムそのものを実感&納得することが目的） ➤ 導入と団体の活動や組織紹介（20分）、体験（120分） <p><トレーニング②（3級）></p> <ul style="list-style-type: none"> • 引き出しトレーニング3.5～4時間（引き出す力をつけることが目的、座学と実践） ➤ 参加者自己紹介（40～60分） ➤ プログラムのねらい、時間配分、心得についての説明（15分） ➤ 引き出すためのポイントの説明①（15分） ➤ ペアワーク（15分）+難所やよくできたことの洗い出し（10分）×2回 ➤ 引き出すためのポイントの説明②（15分） ➤ ペアワーク（15分）+難所やよくできたことの洗い出し（10分）×2回 ➤ 休憩（10分）、質疑（10分） ➤ 実践現場を想定した練習（10～15分）

		<ul style="list-style-type: none"> ➤ 修了証のお渡し（5～10分） • 実践現場（こどもたちとの対面の現場）への案内（5分）
講座の提供方法	個別型/集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> • 実践現場に合わせて対面とオンラインの両方で実施。（実践現場が対面の場合は研修もすべて対面で行う。オンラインの場合は、オンラインでのファシリテーションのトレーニングを行う。）
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> • わくわくナビゲーター同士の学びと成長のコミュニティづくりを進めている。 • 実施前に、わくわくナビゲーター達は自主練をする。 • 実施日当日、1時間程度事前の確認のためのミーティングの場を設けている。 • 終了後に振り返りを行っている。

• 講座の特徴や考え方

こどもたちへのプログラム実施当日には、わくわくナビゲーターや地域サポーターが集まって1時間程度の事前準備を行う。この中で、事前に実施した研修の振り返りやこどもとの関わりにおけるマインドセット、声出し（自己紹介）を行う。これにより、事前打ち合わせの段階で大人が楽しい空気を創り出し、いつもの正解のある授業とは異なることを感じてもらっている。

こどもたちが待つ教室に入ると、大人たちが「今日はゲームをしに来ました。イエーイ！」と盛り上げ、順番に自己紹介を行う。一人が「私の名前は●●です。普段は××で仕事をしています。このお仕事では、～～のようなことをしています。私のことはともちゃん（例）と呼んでください。」と自己紹介すると、大人全員で「ともちゃん！！」と呼び、場を和ませる。

最も重視しているのは、大人もこどももフラットに対等に対話を楽しむことである。本プログラムで達成したい目標は、受講者全員が終了後に「楽しかった！」と言えることから始まると考えている。

(ウ) ソーシャルメディア研究会（兵庫県立大学 竹内教授）

• 団体概要⁶

ソーシャルメディア研究会は、青少年がトラブルに巻き込まれることなく、ネットと上手く共生する社会を目指して活動している。そのために、授業・サミット・オフラインキャンプ等を通して、ネットの正しい使い方を青少年が積極的に学びきっかけづくりをしている。

同団体は、大学生が主体の団体である。ネット社会の変化を目の当たりしてきた現代の大学生は、現代の青少年と大人の架け橋になれると考えている。活動を通じて得た青少年の「生の声」をもとに、保護者や企業、行政にも働き掛けることで、社会全体がより良い方向に向かうようにつとめてい

⁶ ソーシャルメディア研究会 ホームページ (<https://www.sma-s.jp/>)

る。

こどもの意見を聴く活動をする大学生をファシリテーターとして養成している。

• 取組概要（養成したファシリテーターの活躍の場）⁷

養成した大学生ファシリテーターの活躍の場として、下記のような活動を実施している。

図表 2-9 大学生ファシリテーター 活動内容（一例）

出張授業・ 教材作成	学校を訪問して、児童・生徒に動画教材を使いながらネットやスマホの安全な使い方について教えている。また、保護者に向けて、青少年のネット利用の現状を理解してもらおう講演も行っている。一部の出張授業では、団体が制作・改訂した教材を使用している。
スマホサミット	児童・生徒が集まり、スマホやネットの使い方を考える活動。児童・生徒は話し合いをしながら、ルールや目標を立てる。大学生はファシリテーターとして、児童・生徒の取り組みを支える活動をしている。
オフライン キャンプ	ネット依存傾向のこどもたちと一緒に、ネットから離れた環境で過ごすキャンプ。ネット以外の楽しみに触れることで、こどもたちにネットとどう接していくかを考えてもらう。大学生は、こどもたちと行動しながら相談やアドバイスなどのサポートをしている。

図表 2-10 大学生ファシリテーター 活動の様子



オフラインキャンプ



出張授業

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成 材名	—	• 大学生ファシリテーター

⁷ ソーシャルメディア研究会 ホームページ (<https://www.sma-s.jp/activity/>)

講座概要	ソーシャルメディア研究会の大学生ファシリテーター養成について	<ul style="list-style-type: none"> • 年間 30 回程度サミットを実施し、いじめ問題、ネット問題、校則等についてこどもの意見を聴いている。大学生ファシリテーターの活躍場面である。 • ファシリテーションの 4 つのポイント <ul style="list-style-type: none"> ➢ ① 発言できる雰囲気・・・アイスブレイクが最重要。大人（特に地位がある人等）も参加する。 ➢ ② 大人の態度・・・腕組みやにらみつけることはしない。支配しない。こどもの常識を聴くという態度が重要。支援者である必要がある。 ➢ ③ 議題の精選・・・自分事のできる議題、生活に直結する議題を選ぶ。 ➢ ④ 発言の意味を先に明示する・・・結果がどう反映されるのかを明確にする。
構成	ソーシャルメディア研究会の大学生ファシリテーター養成方法	<ul style="list-style-type: none"> • 学生はファシリテーション場面であるサミットを企画するチームと、サミット当日にファシリテートするチームに分かれる。ファシリテートチームは 2 泊 3 日の合宿で訓練をしたのち、当日の事前準備 2 時間で本番に臨む。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> • 司会をしない、自分の意見を言わない、説教をしない、失敗を責めない、こどもの意見を復唱する、質問の意図と違うことがあっても失敗が目立たないようにフォローする、ということ伝えていく。 • こどもを満面の笑みで迎えることを共通認識とし、こどもを迎えた後の話題の振り方まで準備する。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<ul style="list-style-type: none"> • 先輩がその場で後輩に教えながら実践する OJT で養成している。教員は先輩の支援者として位置づけ、具体的な指示は極力しない。 • 2 泊 3 日の合宿 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 講義の時間は 3 日間のうちの 4.5 時間で、自炊しての食事やキャンプファイヤー等も含め、チームビルディングに時間を割いている。 • 当日の事前準備 2 時間 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 参加者や当日の流れを共有した後、自己紹介を行う。その後、アイスブレイクを 3 つ体験し、班長をきめてもらう。 ➢ こどもに何について議論してもらうか、どういう要素を話すとかどもがテーマを自分事化できるかを事前に話し合い、決めておく準備を重視している。

講座の提供方法	個別型 / 集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> すべて対面で実施している。
養成後の活動支援とそ の方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> プログラム終了後に2時間の振り返りを行っている。

- 講座の特徴や考え方

子どもに対して、大人が力で上から言っても意味がないが、子どもに全部任せてもうまいかないという考えのもと、子どもだけで何かに取り組むのではなく、子どもが困ったらすぐ大人が手を差し伸べられるよう、大人が支援者、ファシリテーターになることを重視している。学生は成長意欲が強い特徴があるため、ファシリテーションを行った後は2時間かけて振り返りを行うことで成長を実感できる経験を提供し、継続的な活動につなげている。

(エ) NPO 法人アーダコーダ

- 団体概要⁸

子ども哲学・おとな哲学 アーダコーダは、正解のない問いについてグループで考える哲学対話を社会の中で実践的に活用するためのスキルやプログラムを提供する NPO 法人である。アーダコーダの哲学対話は、幼稚園に通う子どもたちから年配の方まで対象年齢を問わず行っている。毎日の暮らしの中にある正解のない疑問や不思議のタネについて、アーダコーダと考えを交換し、お互いが時間をかけて考えを深めることができる時間を提供する。「子ども哲学」を提供することも哲学ファシリテーターを養成している。

- 取組概要（養成したファシリテーターの活躍の場）⁹¹⁰

<子ども哲学>

参加した子どもたちが、一つの「問い」をめぐって考えたこと・感じたことを述べあい、聞きあうことで、考えを深め、お互いを理解できるようになること。そのための技術と、姿勢を身につけること。このことを子ども哲学の目的と定めている。日々の暮らしや、今日の学校の中で思っていることを「そもそも、これってこうなんじゃないかな」とポロッと尝试してみる。みんながどう思っているのか、一緒に考える。これがこ

⁸ アーダコーダ ホームページ (<https://ardacoda.com/>)

⁹ アーダコーダ ホームページ (<https://ardacoda.com/kodomotetsugaku/>)

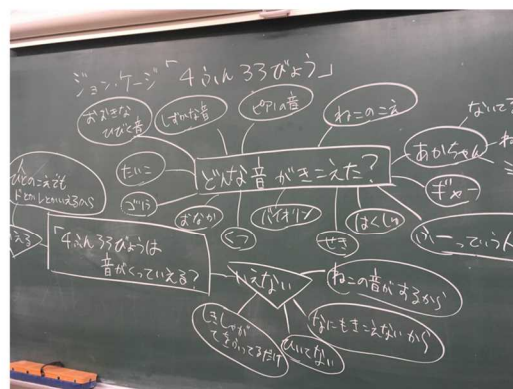
¹⁰ この取組で活躍できるファシリテーターは一部である。

もの生きる力になり、ひいては学校の力になる。アーダコーダでは、こどもたちが「哲学する」場をつくるために、こども哲学の普及に積極的に取り組んでいる。

図表 2-11 「こども哲学」の活動の様子



企業内での親子向けイベント



学校での特別授業

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	<ul style="list-style-type: none"> こども哲学ファシリテーター
講座概要	こども哲学ファシリテーター養成講座（初級編）について	<ul style="list-style-type: none"> 「こども哲学」を行うために必要なことについて実践を通して学ぶ講座。 受講者のおよそ半分がファシリテーションの経験がない人である。受講者は教師、保護者、教育機関や研修会社の職員の大きく3通り。 実施体制は、各グループに一人ずつと全体を見る講師一人を配置している。オンラインでも同様である。 受講前に課題図書「こども哲学ハンドブック」を読んでもらい、読んでいる前提で講座を進める。 講座では企画のコーディネートまでは扱わない。 講座のすべてを受講した人だけにのみ修了証を提供している。途中欠席した場合は、欠席部分を次回の講座実施時に受講すれば修了証を出している。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> 初級編は1日6時間の講座を2日間実施する。1日目、2日目共に講義と実践（模擬）を行う。 初級編を1回受講ただけで一人前のファシリテーターとしてこども哲学の現場に出ることはない。

		<ul style="list-style-type: none"> • 初級編の次の講座として、実践編がある。実践編では3か月間、プログラムの企画から実際のファシリテーション、終了後の振り返りまでを行う。実践編ではアーダコーダが集めたこどもを相手にファシリテーションを行う。 • アーダコーダ主催ではないが、実践編と並列に近い位置づけで「哲学対話のファシリテーターのための探求コース」もある。哲学対話のファシリテーションを複数人が行い、メタダイアログという形でそれぞれのファシリテーターの考えや学び方等を聴く。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> • こども哲学の説明とファシリテーションができる人をファシリテーターとして考えている。 • アーダコーダが考える「ファシリテーター」は、「受講者が探求することをサポートする人」である。こども哲学の場合のゴールは、ファシリテーターがいなくても参加者同士がお互いの安全性に配慮して深い探求ができることである。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<ul style="list-style-type: none"> • アーダコーダ主催の講座はいつも同じカリキュラムである。 • テキストは、「こども哲学ハンドブック」とワークブック「はじめてのこども哲学」で、講義では、パワーポイント資料とワークブックを使いながら受講者がアクティブに参加できるよう工夫する。 • 1日6時間の講座を2日間実施する。1日目、2日目共に講義と実践（こどもを相手ではなく模擬）を行う。 • 最も身につけてほしいことは講義で伝える。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 1日目の講義では、こども哲学が何かについて、特徴的なアプローチや歴史的な流れ等を話す。 • 2日目の講義では、心構えとスキル、セーフティの考え方を伝える。4人×5グループに分かれる。1グループに対して講師が1人つく。1人当たりファシリテーションの実践20分、フィードバック20分を実施する。合計160分を実践にあてている。 <p>《第一部》</p> <ul style="list-style-type: none"> • こども哲学の必須グッズ「コミュニティボール」をつくろう！ • 講義「こども哲学とは？/こども哲学の進め方」 • やってみよう！こども哲学 • 動画「こども哲学」やり方解説 <p>《第二部》</p> <ul style="list-style-type: none"> • 定番アイスブレイク「質問ゲーム」を試みる • やってみよう！こども哲学（進行に挑戦） • トーク「ファシリテーターとして、こんなことに気をつけています

		<ul style="list-style-type: none"> ※二部を通して、適宜「質問タイム」を設け、個々の疑問に答えながら進める。
講座の提供方法	個別型/集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> オンラインでも対面でも実施可能である。現在はすべての講座をオンラインで実施している。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ オンラインだと様々な地域の人が受講できる。オンラインになったことで受講者層が変わり、海外在住者が参加することもある。 ➤ オンラインでは、実践の時間はビデオオンで参加してもらう。 ➤ オンラインではグループワークを多くしたり、質疑応答の時間を2日間合計で2時間とったりすることで見るだけにならないよう工夫をしている。 ➤ オンラインでは、1回の講座に参加する人数は20人程度に抑えている。 対面のほうが、人間関係が構築されやすい。講師と受講者の関係が構築されると、受講者にその後のプログラムへの参加を促しやすい。受講者同士で何らかの取組を行う流れができることもある。
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> 基本的には受講者それぞれが学校や家庭といった自身の場にて活躍している。 修了生の中でアーダコーダの案件でファシリテーションしたい人のリストを作成し、ボランティアや謝礼付きの講師として参加してもらうこともある。

- 講座の特徴や考え方

安全な環境で対話ができることを重要視しており、セーフガーディングの考え方を受講者に丁寧に伝えている。その他、質疑応答や説明の随所で、考え方や「なぜ講座で●●を行うのか」について丁寧に説明するようにしている。

(オ) 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会 (FAJ)

- 団体概要¹¹

ファシリテーションの普及を通じて、ビジネスの分野においては、生産性・モチベーション・リーダーシップ力を向上させ、社会的な分野では、市民活動・地域経営・国際交流の質を高め、教育の分野では多面的な視点を持つ人材を育成していくことを目指し、ファシリテーションを学ぶ講座を提供してい

¹¹日本ファシリテーション協会 (FAJ) ホームページ (<https://www.faj.or.jp/about/mission/>)

る。

ビギナーからプロフェッショナルまで、ビジネス・まちづくり・NPO・教育・環境・医療・福祉等、多彩な分野で活躍するファシリテーターが集まり、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展をめざして、幅広い活動を展開している。

• 取組概要（養成したファシリテーターの活躍の場）¹²

ファシリテーターの活躍の場として、下記のような活動を実施している。

図表 2-12 ファシリテーターの活動内容（一例）

定例会	これからファシリテーションを勉強したい方からプロフェッショナルを目指す方まで、毎回20～200名程（開催地域・日時によって異なる）が集まり、小グループに分かれてのワークショップ形式などで研究や勉強をしている。定例会自体がファシリテーションの実践の場である。
災害復興ファシリテーション	2011年3月11日に東北・関東を襲った地震・津波・原発事故の複合大災害からの復興に関し、地域コミュニティの再構築、および自治体や社会福祉協議会、NPO・NGO間のネットワーク強化などの領域において、ファシリテーションを活用したさまざまな支援を行うために、災害復興支援室（現：災害復興委員会）を設置し、ファシリテーションを通じて災害復興・防災・減災に関する活動を行っている。
地域イベント	ファシリテーションの普及を目指し、FAJ 内外の方々との様々な交流を図るため、全国各支部で開催されている。会員は、イベントを作り上げていく過程そのものでファシリテーションを体感することができる。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	• ファシリテーター
講座概要	ファシリテーション基礎講座（公開セミナー）	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーションの基礎を講義と演習を通じて、初歩から一歩ずつ体系的に学ぶ講座である。 • 対象は個人。職場、地域、医療現場等からの参加がある。話し合いのある場等で困っており、より良くしたいと思って受講する人が多い。 • 1 クラス 20 名、1 日で実施する。対面とオンラインの両方で講

¹²日本ファシリテーション協会（FAJ） ホームページ（<https://www.faj.or.jp/activity/service/>）

		<p>座を提供している。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 実施体制としては、対面では講師 1～2 名、オンラインの場合はその他にテクニカルサポートや全体への目配り役を 1 名配置する。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーション基礎講座でファシリテーション技術の基礎を体系的に学ぶ。 • より学びたい方向けに、ファシリテーション公開講座（実践編）やファシリテーション公開講座（特別編）も用意している。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーションとは人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りすることである。 • 日々ファシリテーションを実践し、より良くするためのヒントを持ち帰ることを目指している。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<ul style="list-style-type: none"> • 教材はオリジナル FAJ テキスト。約 60 ページのパワーポイントスライドで当日配布している。事前学習教材は特にない。 • 場のゴールをどこにおくか、役割分担をどうするか、アイデアを出してもらうための雰囲気づくり、アイデアを整理して結論を出すためのファシリテーションの 4 つのスキルを学ぶ。 • ファシリテーションを体験してもらいながら、グループのメンバーでフィードバックする。振り返りに多くの時間を割いている。 <p><構成></p> <ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーションとは？（導入）（1 時間）：ファシリテーションとは？、「プロセス」と「コンテンツ」.....等 • 場のデザインのスキル（1 時間）：場をデザインする 5 つの要素、場の雰囲気づくり、話し合いの進め方 • 対人関係のスキル（2 時間）：聴くことが安心感、信頼感を与える、質問の使い分け、柔らかい自己主張....等 • 構造化のスキル（2 時間）：主張を明確にする、議論の全体像をつかむ、議論を書きとめてみよう！、議論を整理する道工具箱....等 • 合意形成のスキル（1 時間 20 分）：言葉の奥にあるものを探る、対立解消のやり方 • 明日からやれること（まとめ）：あなたは明日から何をやる？、もっと上達したい人のために
講座の提供方法	個別型 / 集合型、座学/実践、対面/オンライン/	<ul style="list-style-type: none"> • 元々対面で実施していたが、コロナ渦をきっかけにオンラインでも実施している。 • オンラインの話し合いの場であっても基本的な考え方や求めら

	ハイブリッド/XR、理由	<p>れるスキルは変わらないため、講座内容は基本的に同じである。小まめに声かけをする、画面共有やブレイクアウトルーム等デジタルツールをうまく使うことで話し合いを進める等のコツは伝えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> オンラインでは、雑談やネットワークづくりを自然に行いにくいいため、講座終了後に講師が残って雑談する時間を設けている。
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> アフターミーティングや定例会（勉強会）、FAJの組織運営、FAJの社会課題支援の場での実践機会を提供している。

- 講座の特徴や考え方

声にならない声を公平に拾い、世の中で最適解をつくっていくためにファシリテーションを普及している。皆がファシリタティブに行動できる社会が生まれればファシリテーターは不要であり、平和につながると思っている。

基礎講座はファシリテーターを「養成」するためではなく、あくまで「講座」である。ファシリテーションは1回学んで終わり、知識が入って終わりというものではないという考えから、認定制度は設けていない。公開講座の講師についてはFAJ内で実施する講師トライアル合格者としている。

FAJは体感・経験を繰り返しながら学んでいけるよう、多様な分野の経験者やファシリテーションの実践者のプラットフォームの役割を担うようにしている。

(カ) ミテム株式会社¹³

- 団体概要¹⁴

ミテムは、人材育成・教育のプロフェッショナルとデザインの力を軸に、人、組織、社会の課題を解決するコラボレーションカンパニーである。人びとの意志を引き出し、目指す未来像をともに描き、創造的なまなざしと感性の力で課題を捉え直し、共創の力でこれまでにないアイデアを生み出す。人材開発／教育支援事業、デザイン支援事業、地域共創事業を手掛けており、人材開発／教育支援事業の中で「ファシリテーションスキルアップ研修¹⁵」を実施している。

- 講座の概要

項目	ヒアリング結果
----	---------

¹³ ミテム株式会社が実施している講座は、企業の従業員等に向けた講座であるため、「取組概要（養成したファシリテーターの活躍の場）」は記載していない。

¹⁴ ミテム株式会社 ホームページ (<https://www.mitemo.co.jp/about/>)

¹⁵ ミテム株式会社 ホームページ (<https://www.mitemo.co.jp/service/facilitation-skillup/>)

養成人材名	－	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーター
講座概要	ファシリテーションスキルアップ研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ミーティングをファシリテーションすることを想定した研修。 ・対象は、ファシリテーションの概要を学びたい、チームメンバーに会議進行の共有認識をもたせたい、ファシリテーションスキルを向上させるための実践知を得たい個人である。 ・半日の研修。 ・講師 1 人に対して 20 人～30 人の受講者が参加する。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の従業員等に向けた研修の提供であるため、単発の研修提供である。
養成方針	養成対象者に求める資質	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には、オープンとクローズの質問それぞれの使い方等、ファシリテーションの枠組み等、役に立つ技術や知識を教える。 ・安心、安全な場を作ること学んでもらう。ファシリテーターは、激しい同調圧力の社会で生きている日本のこどもたちから忖度のない意見を聴くことができる必要がある。
カリキュラムや教材	養成講座カリキュラム、使用教材	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーションスキルとは、場のデザインスキル、対人関係スキル、構造化スキル、合意形成スキルである。アイデアを発散させてグルーピングし、収束させ、意思決定するまでのプロセスを学ぶ内容である。 ・20 分程度で講義と質疑応答を行った後、ワークを行う。ファシリテーションを実施する側、ファシリテーションを受ける側、観察する側に分かれて実践し、振り返りを行う。 ・場へのチェックイン、チェックアウトに 1 時間は使っている。 ・講師が巡回して、必要に応じて介入する。ワークは、内容によってペアで実施したり、3 人で実施したりする。
講座の提供方法	個別型 / 集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> ・対面・オンラインの双方を実施している。
養成後の活動支援とそ の方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の従業員等に向けた研修の提供であるため、修了後の活動支援はない。

- ・ 講座の特徴や考え方

講座を受講すればファシリテーションができるというものではないため、講座は「例えるなら路上に出る前の仮免をとるためのもの」と考えている。ファシリテーションの現場に出てスキルを熟達させていくための入り口として講座を位置づけている。

5) 対象団体からの養成講座に対する主な意見

図表 2-3 に記載の養成方針の論点のそれぞれについて、対象団体から意見をもらった。

• 受講対象

受講対象者に求められる資質は、「こどもに対して誘導したいゴールを持たない」、「こどもをジャッジしない」、「教えるという姿勢をとらない」、「こどもと対等でフラットな状態でいられる」、「リスクに敏感である」こと等が挙げられた。また、教師等の教育関係者については、「こどもと接する職業であるためファシリテーターに適してはいるが、自分の学校の生徒に対しては、教える責任があるためファシリテーションをすることが難しい」という意見や、「教師がファシリテーターになるには『アンラーニング（学習棄却）』をするコンテンツが必要である」という意見があった。

• 想定するファシリテーション場面

政策決定プロセスにおいてこどもの意見を聴き反映することを前提にしたファシリテーションとなるため、その想定場面を受講者に具体的に示す必要がある、という意見が多く挙げられた。

この際、広くこども全般に関わるテーマを話すのか、個別の支援に関わるテーマで対象となるこどもが直接関わるのかで、ファシリテーションのあり方が変わるという指摘を受けた。前者の場合は大人数でのグループファシリテーションが想定される一方、後者の場合は少人数で言葉の壁を含めて意見を聴く環境を整えたり、心理的・社会的サポートが必要になる、という見解が示された。いずれの場合も、年齢、ジェンダー、人種、言葉、宗教、政治的信条、国籍、社会的背景等によって差別されず、参加が限定的にならないことを担保することを学ぶことが重要という意見があった。

また、意見を対面で聴くかオンラインで聴くかについては、多くのこどもが広く関わるテーマであればチャットやオンラインで意見を聴くことが考えられるが、より丁寧に意見を聴くのであれば対面がよいという意見があった。また、今後全国でこどもの意見を聴く方法として、例えば東京でメインのファシリテーターが対面で意見を聴き、地方でもグループファシリテーターがこどもと対面で意見を聴ける状態で、都市と地方をオンラインでつなぐハイブリッドの方式も考えられるというアイデアも提示された。

• 講座の主催者

こども意見ファシリテーター養成は、専門性が高く、こどもに対する責任があるため、まずは国主催の事業という形のほうがよいという意見が多かった。形だけのファシリテーションにならないよう、ファシリテーターの質を担保する方法を検討する必要があるという意見もあった。

• こども家庭庁、行政機関、民間事業者の役割分担

行政と民間の役割分担は、国や地方の行政機関が主催し、民間事業者や NPO が委託で養成事業を実施する形が想定しやすいという意見が多かった。民間に事業を委託する際は、モデルプログラムのどこを変えてよいのか、変えてはいけないコンテンツは何かを明示する必要があるという指摘もあった。

委託する事業者は、「こどもの権利やこどもの安全・安心を守ることについてのポリシーを持っている」、「こどもの権利やこどもの安全・安心を脅かすインシデントが発生した際の通報窓口を持っている」ことが重要であるため、入札要件として検討すべきという意見もあった。

• 講師

講師に必要な資質は、「コミュニケーション力」、「ファシリテーションスキル」、「（リスク等の）分析力」という基本的なスキルの他、「こどもの権利」、「意義ある参加（こどもに関係のある政策についての理解を含む）」、「こどもの最善の利益」、「こどもの安全」、「継続的なプロセス（本事業の位置づけ）」、「メディアコミュニケーション（肖像権の利用を含む）」を理解していることが重要であるという意見があった。

講師の質を担保するためには、講師で講座実施の前に、打ち合わせで講座の趣旨の説明をしておくこと、複数の講師がいる場合は講師同士の認識を共通化すること等が必要であること、また、ファシリテーションのスキルを教える講師以外に受講者の振り返りをサポートするスーパーバイザーを置いたほうがよいという意見があった。

• 研修内容

到達目標は、基礎編では最低限必要なことを学び、各専門団体や自治体で学びを深めていくのがよいとの意見があった。最低限こどもが傷ついたり、トラブルが起きたりしないレベルを基礎編の習得レベルとし、ファシリテーターとして活動しながら OJT で学ぶ。最低限基礎編で学習すべきこととして、「こどもの意見表明に関する前提知識（こども家庭庁の立場や意見表明とは何か等）」、「セーフガーディングの考え方」、「ファシリテーションの基本スキル」等の理解が挙げられた。また、こどもの成長段階別の発達の違いも理解しておく必要があるという意見もあった。

また、受講しやすさを考慮して 1 日等の短期間のプログラムをつくることが想定されるため、広い概論を話すのではなく状況設定を行い求められる内容を提供する、短い時間にたくさんの内容を詰め込まない、場へのチェックインとチェックアウトを丁寧に行う、というアドバイスがあった。

また、本来は座学と実践を組み合わせる 3 日間程度は研修期間として必要なため、オンデマンド動画を別途作成して事前に学習できるようにすることがよいのではないかという意見があった。

ファシリテーションの想定場面は、政策についてこどもから意見を聴く難しい内容となるため、模擬会議で実践経験やフィードバックを受ける時間を設けることについて、全ての有識者の賛同を得た。模擬会議のテーマは、「よりよいファシリテートをするために」、「こどもと上手に話すには」等、参加者が関心を持っているテーマ、共通認識を持てるテーマが案として挙げられた。また、模擬会議のグループは、話が弾む人数は 4 人が定説で 5～6 人になると発言者の偏りが出る、という意見があった。

想定場面がこどもにとって難しい内容になることから、ファシリテーション場面では楽しくリラックスした雰囲気を作成することが求められることを想定すると、研修自体が楽しいものとして受講者が本来あるべきファシリテーション場면을体験できることが重要という意見があった。例えば、研修会場に風船を飾ったり、お菓子を置いてリラックスした雰囲気とする、場へのチェックインの時間を十分にとり、場が温まった後で学習内容を話す、等の意見があった。

養成講座後の活動を見据えた意見も多く挙げられた。まず、チェックアウトの時間は、実践につながる意識づけを行うことである。また、講座を受講者同士のつながりをつくる場にするのが重要なため、「チームで目標に向かって活動する」、「自己開示をする」の2通りが受講者同士の仲を深める方法としては挙げられた。振り返りの時間の重要性についてはほとんどの有識者の共通意見であった。具体的な振り返りの実施方法としては、「自分のバイアスに気づくためお互いにフィードバックしあう」という提案があった。

• 研修方法

座学はオンデマンドを活用し、講座は集合型でしかできないワーク等に集約したほうがよいという意見が多く挙げられた。

オンライン講座によるファシリテーター養成については、スピード感を持ってファシリテーターを養成するには有用との意見が多くあった。オンラインでの講座実施にあたって対面でのファシリテーションと異なるオンラインファシリテーションならではの留意点を学べるようにすべきだとして、バイタルサインが読み取りにくいこと、接続等のトラブルシューティング（マイク、音、メンテナンス、「落ちた」時の対応等）が必要であること、会話にラグがあり盛り上がりにくいいため対面以上に盛り上げる意識が必要になること、等が挙げられた。また、オンラインでは相手の反応が分かりづらいため、画面オンにする、画面の近くに来てもらう、全面に顔を映してもらい、身振りを強めに話してもらう等の参加者への呼びかけをすることや、講師自身も画面の使い方や身振りを増やす等の工夫が必要という意見があった。

• 教材

十分に知識をインプットしてほしいのであれば、事前教材は気楽な内容や量がよいという意見があった。具体的に教材に含めるべき内容としては、こども相手であるがゆえに気をつけるべきポイントやセーフガーディングが挙げられた。

• 研修後

ファシリテーターがつながり、学び合いやフィードバックをするためのコミュニティが必要であるという意見が多くあった。ファシリテーターたちの自主的な学びの場や、コミュニケーションの場を通じて、受講後に経験値を高めていくことが必要である。

また、全国でファシリテーターの養成事業を展開する際には、ファシリテーターが相談できるスーパーバイザーを地域ブロック単位で置く体制を作ることにより、学習後の経過観察ができるようにするとよいという提案があった。その環境の中で、応用編を受講してほしい人に対して受講を案内することもでき

るのではないか、という意見があった。

- その他

こども意見ファシリテーターの受講者は大人が想定されているが、全国でこどもの意見を聴くにあたっては、年齢に近い人がファシリテーションをするほうが、こどもが話しやすいという観点から、大人がファシリテーション全体の質を担保しつつ、グループファシリテーションはこどもが担うこと、例えば大学生が高校生向けに、高校生が中学生向けに、中学生が小学生向けにファシリテーションを行うことが考えられる、という意見があり、今後の検討事項としてこども向けのファシリテーション講座や大学生を対象とした講座開催が挙げられた。

関連して、ファシリテーターに対する謝金について、学生がファシリテーターの場合、ボランティアとして謝金が支払われない地方自治体が多いため、学生であっても社会参画のためには謝金が必要だということを主催者向けのモデルプログラムで伝える必要があるという意見があった。

5. 自治体等へのヒアリング及び取組視察

(1) ヒアリング・視察対象

こどもの意見聴取・参画の取組を実施しており、独自に人材養成もしくは外部連携により養成している自治体等を対象として、図表 2-13 の通りヒアリングと視察を実施した。

川崎市については、視察可能な日程で当該取組が開催されていなかったため、ヒアリングのみの実施とした。

図表 2-13 自治体ヒアリング・視察対象一覧（ヒアリング実施日順）

#	所属	担当課	ヒアリング実施日	視察日
1	川崎市	教育委員会事務局 生涯学習部 地域教育推進課 (川崎市子ども会議事務局)	2023年8月23日	-
2	磐田市	政策推進課	2023年8月24日	2023年7月13日
3	児童健全育成推進財団	-	2023年9月1日	2023年9月8日

(2) 実施方法

ヒアリングについては、各自治体にそれぞれの人材養成の取組と、図表 2-3 に示したこども意見ファシリテーターの養成方針の論点についての意見を聴いた。ヒアリングの実施方法はオンライン（Teams）とし、所要時間は 1.5～2 時間程度である。

視察については、各自治体の取組の実施日に現地を訪問して取組を視察した。

(3) ヒアリング・視察結果

ヒアリング・視察の対象自治体における人材養成の取組や、こども意見ファシリテーターの養成方針の論点に対する意見を、下記に記載する。

1) 対象自治体の取組

ヒアリング・視察対象自治体の取組概要をまとめ、ヒアリングにて調査した人材養成の取組を各自治体共通の観点でまとめている。ヒアリングの観点は人材養成講座の「講座概要」、「構成」、「養成方針」、「講座の提供方法」、「事務局体制や予算等」、「取組において抱えている課題」「養成後の活動支援とその方法」である。

(ア) 川崎市¹⁶

• 取組概要

川崎市子ども会議は、「川崎市子どもの権利に関する条例」の第 30 条に規定されているもので、こどもが自分たちの手でこどもの権利や川崎のまちづくり等について活動を進めていくものである。同会議は 2002 年に発足し、小学校 4 年生～18 歳のこどもたちが 1 年間活動している。

年度により、子ども会議を居場所としている子（不登校の子、学校では発言できない子）、川崎市をよくしたいという意志を持った子（生徒会、部活の部長の子）等、様々なこどもが集まっている。

子ども会議のメンバーに伴走するサポーターを養成している。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	• 子ども会議サポーター
講座概要	子ども会議サポーター養成講座	• 今年で 22 期目を迎える子ども会議が始まった当初よりサポーター養成講座を実施している。 • 受講者は公募（川崎市民、18 歳以上）だが、現状は子ども会議の卒業生が大多数を占めている。 • 講座の内容は、①毎回の活動後の振り返り。②年一回、振り返りに合わせてテクニック講座の実施。 • サポーターとして活動するにはテクニック講座の受講が条件。
構成	プログラムの構成	• 年間 20 回以上の定例子ども会議後に 2 時間程度事務局とサポーターで振り返りを行い、次の子ども会議の進め方や雰囲気づくりなどを検討する。その中で、こどもとの接し方、意見の聴き方を相談している。話し合いの場に講師はおらず、全員で

¹⁶ 川崎市ホームページ (<https://www.city.kawasaki.jp/880/page/0000032697.html>)

		<p>相談しあっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 今後、子ども会議の卒業生以外がサポーターになることが想定されるため、こどもの権利に関する条例やこども観を教えることが必要である。 • 年に一回テクニック講座を実施している。テクニック講座は、講師を招聘して実施する。例) 意見が多く出てきたときにどのように話を整理するかの思考ツール (KJ 法等) の使い方 • 子ども会議の卒業生以外でサポーターになった方は見学期間を経て活動を始める。
養成方針	ファシリテーター養成の方針	<ul style="list-style-type: none"> • 川崎市では、対等な立場でこどもから意見をもらうことを条例で定めている。大人が決めたことについてこどもから意見を聴くのではなく、こどもがありのまま本音を言いやすい雰囲気をつくる。
講座の提供方法	個別型 / 集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> • 子ども会議を居場所としているこども達のためにも、子ども会議はコロナ禍でも対面で実施した。それに合わせて、サポーター養成講座も対面で実施している。
事務局体制や予算等	事務局の体制や予算の規模	<ul style="list-style-type: none"> • 教育委員会の子ども会議担当 3~4 名で実施している。こどもから出てきた意見によって、関係する部署と連携して政策への反映を検討している。 • 予算は年間 300 万円程度。主な用途はこどもの交通費と昼食補助、こどもの議論で使う模造紙等消耗品。 • サポーターへの謝礼は、交通費を含めた謝礼として、1 日 2000 円である。
取組において抱えている課題	取組において抱えている課題	<ul style="list-style-type: none"> • 子ども会議の拡大に伴いサポーターの裾野の拡大が課題となっている。サポーターを公募すると、応募した人が信頼できる人なのかどうか、こどもが安全でいられるか、こどもたちへの接し方に問題がないかが懸念点である。
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> • 子ども会議のためのサポーター養成であるため、養成されたサポーターは子ども会議で活躍する。

• 講座の特徴や考え方

子ども会議は、こどもを大切な市民と捉え、同じ時代を同じ地域で暮らす「パートナー」としてこどもの意見を尊重し、こどもの強みと大人の強みを掛け合わせて形にしていく取り組みである。そのため、こ

ども同士だけでなく、こどもが大人とも話し合う機会をつくり、様々な立場の人の視点を取り入れた提案を検討してもらっている。サポーターには、こどもがありのまま意見を発表できる雰囲気づくりや大人と話し合う際にこどもが自分たちの気持ちを伝えられるようにサポートする役割をお願いしており、単発のイベントではなく年間を通じてこどもと関わり、伴走している。

(イ) 磐田市¹⁷

• 取組概要

いわた高校生まちづくり研究所事業（高校生企画提案事業）は、高校生の柔軟な発想と創意工夫を活かして、市が抱える課題の解決や事業の推進を図るとともに、将来の磐田市のまちづくりを担うべき人材の育成を目的として実施している。平成 24 年度にヤング草莽（吉田松陰の言葉：草莽崛起「在野の人よ、立ち上がれ」）塾としてスタートした。

毎年市内の高校生が、その年のテーマについて約 5 か月間かけて調査研究を行い、市長等に向けて企画提案を行う。高校生から提案された内容は本気で事業化を目指し、これまでに「磐田市のごみ袋にしっぺい（磐田市のイメージキャラクター）の絵をつける」、「磐田市のダンスの作成」、「道路照明等の LED 化」等が実現している。

高校生から単純にまちづくり提案を募っても市政に反映することは難しいため、市の職員 10～20 名と大学生サポーターがアドバイザーとして高校生グループに伴走するようにしている。職員アドバイザーは原則複数名で学校を担当する。可能な範囲で事業経験者と未経験者の組み合わせにしている。大学生サポーターは特定の学校を担当せず、全体をサポートする。

令和 3 年度より行政職員及び大学生サポーター向けにアドバイザー研修を実施している。アドバイザー研修の講師は特定非営利活動法人わかものまち代表理事 土肥潤也氏である。毎年アドバイザーを 10 人～20 人養成しているため、累計 30～40 名程度が研修を受けている。かつてヤング草莽塾に高校生として参加していた人が行政職員となり、アドバイザーとして活躍している例もある。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	—	• 行政職員アドバイザー
講座概要	行政職員アドバイザー研修	<ul style="list-style-type: none"> • 市内のアドバイザー希望者と大学生サポーターを対象に実施する。 • 令和 5 年度の受講者は行政職員 12 名（主事 10 名、主任 1 名、副主任 1 名）、こども園・幼稚園職員 2 名（園

¹⁷ 磐田市 ホームページ (https://www.city.iwata.shizuoka.jp/kosodate_kyouiku/shougakkou_cfuugakkou/1001845.html)

		<p>長、教諭)と大学生サポーター2名である。</p> <ul style="list-style-type: none"> • いわた高校生まちづくり研究所の初日に実施する。
構成	プログラムの構成	<ul style="list-style-type: none"> • 職員の負荷を考慮して事業説明を含めて1時間半以内である。 • アドバイザー研修の時間配分は、担当課からの事業説明(30分)、講師による導入と講義(30分)、ワーク(10分)、まとめ(3分)。 • 研修プログラムは50分と短く、座学である。スキルに関するレクチャーはない。研修直後に実践の場が用意されているためOJTとして学べる設計になっている。 • アイスブレイクは、アドバイザー自身が中高生の時のことを想起する内容である。アドバイザーは高校生の揺らぎを支える立場であるため、自身の経験をもとに関わり方を考える必要がある。
養成方針	ファシリテーター養成の方針	<ul style="list-style-type: none"> • 高校生が意見を言いやすい、安全、安心の環境を作ることが一番重要であるため、アドバイザーが自分の意見を言うのではなく、高校生の意見を尊重してブラッシュアップして実現しやすくすることがアドバイザーの役割だと伝えている。 • ファシリテーターの役割は、こどもや若者の声に説得力を持たせること(たて、よこ、そろばん(※)の観点で助言する)と仮説検証を行うサポートをすることである。 (※) たて：歴史の経緯を見ること、よこ：他の自治体や世界の事例と比較すること、そろばん：定量化)
講座の提供方法	個別型/集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> • 対面で提供している。
事務局体制や予算等	事務局の体制や予算の規模	<ul style="list-style-type: none"> • 事務局体制は主担当と副担当の2名。 • 予算は50万円程度(講師謝礼、高校生1グループ当たり5万円の予算)である。
取組において抱えている課題	取組において抱えている課題	<ul style="list-style-type: none"> • 高校生の意見を市政に反映するにはアドバイザーが楽しまなければ高校生も楽しめない。しかし、行政職員はえてして真面目であるため、市長向けの発表の取りまとめに力が入りがちである。職員の心理的負担を軽減することが課題である。
養成後の活動	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> • いわた高校生まちづくり研究所のためのアドバイザー養成であるため、養成後はまちづくり研究所にて活躍する。

支援とそ の方法		<ul style="list-style-type: none"> • 可能な範囲でアドバイザーは経験者と新人でペアを組むため、新人アドバイザーはペアでの話し合いやフィードバックを通してOJTで学ぶ環境がある。 • 活動毎に事務局にレポートを提出してもらうことで、高校生の検討内容にアドバイザーの意見が反映されすぎているか事務局が確認している。
-------------	--	---

• 講座の特徴や考え方

本講座はまちづくりについて高校生から意見を聴くために実施されている。静岡県は高校を卒業すると大学進学を機に県外に出て戻ってこないという課題がある中で、これからの市政を担う人材をどう育てていくかという課題がある。いわたまちづくり研究所の活動を通じて磐田市のことを知り、好きになってもらうことで、人材がリターンしてくれることを期待した人材育成の観点も含めた取組である。

行政職員にとっては本業とは別の業務になるため、なるべく講座は短く、効果的なものにすることを重視している。7月に行われる1回目の研修直後に高校生のグループについてファシリテーションを実践する場があるため、活躍イメージを持ちやすいことが特徴である。本格的に稼働する9月～11月は、週1回程度アドバイザーが学校に行き、生徒が慣れ親しんだ場所でプレッシャーを感じずに意見を出せるよう、伴走型のファシリテーションを行っている。いわた高校生まちづくり研究所の特徴は高校生の提案をできるだけ実現しようとしていることであり、グループごとに活動予算とアドバイザーがついている。提案内容次第では、所管課または関係課が予算化して実現を目指している。

(ウ) 児童健全育成推進財団

• 取組概要¹⁸

児童健全育成推進財団は、児童館・放課後児童クラブ・母親クラブ関係組織の支援等の事業を通して、こどもの健やかな育成を図るための活動を推進している。昭和50年に設立された「全国児童館連合会」の時代から、児童館職員を養成する研修を実施している。また、研修と連動した認定児童厚生員資格を運用している。

• 講座の概要

項目		ヒアリング結果
養成人材名	-	<ul style="list-style-type: none"> • 児童厚生員
講座概要	児童厚生員講座	<ul style="list-style-type: none"> • STEP1：基礎研修会（4日間）100人～150人参加。基本機能を学ぶことが主。受講対象者は児童館・放課後児童クラブ現任者（取得資格：児童厚生二級指導員）。

¹⁸ 児童健全育成推進財団 ホームページ (<https://www.jidoukan.or.jp/about/>)

		<ul style="list-style-type: none"> • STEP2：中堅研修会（3日間） 60人～80人参加。地域福祉活動の具体的展開や実践事例を学ぶとともに、自らの活動等の実践をレポートにまとめる、中堅クラスの方のスキルアップ。受講対象者は基礎研修科目を修了した経験5年以上の児童館・放課後児童クラブ現任者（取得資格：児童厚生一級指導員（試験あり））。 • STEP2+：一級特別セミナー 10人程度。自らの活動を10分にまとめ、的確にプレゼンテーションするスキルの向上を重視したセミナー・実践報告を主に行う。受講対象者は児童厚生1級指導員資格を持つ、児童館・放課後児童クラブ現任者（取得資格：児童厚生一級特別指導員 3年更新制）。 • STEP3：指導者養成研修会（3日間）。児童館の運営管理、最新の健全育成施策動向を少人数で学ぶ。受講対象者は中堅研修会を修了した経験8年以上の児童館・放課後児童クラブ現任者。本研修会終了と児童健全育成賞において実践報告（12,000字）に入賞すると児童健全育成指導士を取得することができる。児童健全育成指導士は全国で40人程度。 • 児童館職員、放課後児童クラブ職員の専門職としての社会的証明にもなるため、受講後は資格取得を推奨している。
構成	プログラムの構成 （児童厚生員等 基礎研修会）	<ul style="list-style-type: none"> • 児童館の目的を理解する群（健全育成論・児童館論Ⅰ・Ⅱ） • 児童の発達及び指導の基本を理解する群（児童の発達理論、配慮を要する児童の対応、安全指導・安全管理、救急法（実技）） • 対人援助の理論と方法を理解する群（個別援助活動、集団援助活動、地域福祉活動） • 遊び等の指導技術を習得する群（ゲーム・運動遊び、表現活動（実技）） • ファシリテーションの科目は設けていないが、健全育成論や児童館論で、ファシリテーションの実践に関するノウハウを共有する。児童館論Ⅱでは、場の設定等について扱う。
養成方針	ファシリテーター養成の方針	<ul style="list-style-type: none"> • 受講者同士のネットワークを作ることによって、学びあいを促進している。参加者層での自主的なつながりがあり、何十年も続いているグループもある。研修中に一緒に過ごして関係性をつく

		<p>るために、参加者相互の交流の機会を多く設定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 基礎研修→中堅研修→指導者研修を積み上げて来た方が、後年、基礎研修等で講師を担当することもあり、循環型の研修設計となっている。 • 児童館は0～18歳未満の幅広い年齢層のこどもの対応が求められるため児童館の基本機能に加え、援助技術、安全指導・安全管理、こどもの発達についての理解も重要なポイントである。
講座の提供方法	個別型/集合型、座学/実践、対面/オンライン/ハイブリッド/XR、理由	<ul style="list-style-type: none"> • 全国のネットワークをつくることに重点をおいており、対面にこだわっている。現在は様々な地域の人アクセスしやすい東京や大阪で実施している。 • 研修中に学んだことを具体的な行動計画として現場に持ち帰るために、講座の最後に学んだことの活かし方を紙に書いて発表してもらう。実践に向けて講座終了前に動機づけすることを大事にしている。 • 休憩時間を30分程度とすることで受講者同士の情報交換の場を設定している。休み時間の過ごし方によって講座の満足度は変化する。
事務局体制や予算等	事務局の体制や予算の規模	<ul style="list-style-type: none"> • 以前は国の補助金で実施していたが、現在は自主財源である。 • 研修参加費は一人あたり3万5,000円程度（通学の場合）である。印刷代、会場費、講師への謝金、児童健全育成推進財団のスタッフの経費、保険等の経費である。 • 基礎研修の12科目は推進財団職員、認定児童厚生員資格上位の児童館職員、研究者等が講師を担当する。中堅研修等における事例研究では推進財団はファシリテーターの役割を果たす。
取組において抱えている課題	取組において抱えている課題	<ul style="list-style-type: none"> • 推進財団としては対面での講座を重視して実施するが、コロナ禍で高まったオンラインのニーズにどう応えていくかが今後の課題である。 • 研修後のフォローを全ての参加者に行うことが課題である。
養成後の活動支援とその方法	修了後の活動支援	<ul style="list-style-type: none"> • 児童館職員のための研修であるため、受講者は学んだ内容を自身が働く児童館での実践に活かす。好事例は情報誌や一級特別セミナー等で報告し、全国普及を図る。

- 講座の特徴や考え方

講座内での振り返りや、受講後の学びあい・実践を行ってフィードバックするサイクルを重視している。講座内での振り返りでは、受講者がこどもの声を意識して取り組みたいことを宣言することで、学んだことを実際の現場でどのように活かすかを具体的にイメージすることが可能になる、休憩時間に名刺交換を行うなど受講者同士が仲良くなる仕掛けを用意することで、研修期間を通して今後の活動の際に相談できる仲間をつくることができるようにする、等の工夫をしている。

講義では具体的な事例を入れて説明することで受講者の納得感が増すよう工夫している。

その他、受講者から出た意見が書かれた付箋を模造紙に貼ってグルーピングしたものを講座実施中に壁等に貼り、いつでも見られる状態にしている。

2) 対象団体からの養成講座に対する主な意見

図表 2-3 に記載の養成方針の論点のそれぞれについて、対象団体から意見をもらった。

- 受講対象

特に意見はなかった。

- 想定するファシリテーション場面

こども・若者に対して、政策提言等のアウトプットを出すところまでを意見を聴く対象とするべきかは悩ましい、との意見があった。また、「現場では意見を言えないこども・若者にどう声かけができるかが重要であり、気持ちを代弁することや、声を聴いてもらえたという実感をもってもらえるような場面が必要」という意見もあった。

- 講座の主催者

講座の主催者については、「民間事業者が主催する場合は事業者の選定手続きが必要になるため、国や自治体の主催のほうがよい」、「取組に前向きな自治体は、好きなタイミングで民間事業者に講座の実施を依頼することがよいかもしれないが、取組に消極的な自治体は民間事業者にわざわざ講座の実施を依頼しないと考えられるため、全国でファシリテーターを養成するためには国主催のほうが進むのではないか」という意見があった。一方、「国の研修と言われるとハードルが高い」、「自治体がこどもに対するファシリテーションの問題意識を持っているかどうか懸念される」という指摘もあった。

また、「養成したファシリテーターの活躍の場がどこかによって、主催者を変えるべきではないか」という提案もあった。自治体が運営する場でのファシリテーターの活用を目指している場合は自治体が、民間事業者が社会的価値向上のためにこども・若者の意見を聴く場を運営する場合は民間事業者が、それぞれファシリテーター養成講座を主催することで取組が広がる可能性がある。

- こども家庭庁、行政機関、民間事業者の役割分担

特に意見はなかった。

- 講師

講座の講師としては、「自身のファシリテーション経験をもとに、具体例等も交えながら話せる人が望ましい」という意見があった。

- 研修内容

冒頭で養成された後の活躍の場を明確に例示する必要がある、という指摘があった。

具体的な講座内容については、こども・若者との関わり方は受講者の立場や職業等によって異なるため、こども・若者の声を施策に活かす際の接し方を明確にしたほうがよいことや、こども家庭庁が目指していることやファシリテーターを養成する目的、こども計画について等、ファシリテーション技術の前提を座学で伝えることが必要、という意見があった。また、実際のこどもがオンラインでも登場する場面があるとよいという意見もあった。

また、講座を受講者同士のつながりをつくる場にするのが重要という指摘もあり、受講者が自己開示することや休憩時間を長くとることで、受講者同士の交流を促す提案があった。

振り返りの時間をとることの重要性とともに、講座の最後に、学んだことの実践での活かし方をリフレクションペーパーに書くワークを行う等の提案があった。

講座の所要時間等については、講座時間が長くと脱落が生じるため、オンデマンド 2～3 時間、対面 1 日以上に所要することは望ましくないのではないか、という意見があった。

習得レベルと活動条件については、「こども・若者に悪影響を与えないことが担保できる人であることが最低条件である」、「ファシリテーターとしての活動に意欲を持った人が、次に進めるステップがあるとよい」との意見があった。

- 研修方法

実施方法については、対面でしか学べないことについての意見が多くあった。「ファシリテーションは人の顔色や反応を見て進行を担うものであるため、実技の講座は必ず対面で実施するのがよい」、「講座の熱量は重要であるため、なぜそれを学ぶ必要があるのかについてや、場をあたためる方法等は、対面で丁寧に学ぶ必要がある」等の意見があった。対面で講座を実施するにあたっては、「様々な場所に住む人が参加しやすいよう、すべての県庁所在地で実施されることが望ましい」との提案もあった。

一方、受講者の裾野を広げるためには受講のハードルが低いことが重要であるため、講義部分についてはオンデマンドがよいという意見が多かった。

- 教材

特に意見はなかった。

- 研修後

研修後の受講者へのフォローについては、「市内の養成された人同士のつながりをつくることは必須であるため、受講者のリスト化等によって横のつながりをつくり、ファシリテーター同士で連絡を取りあえる環境を整える必要がある」といった意見があった。

具体的に他のファシリテーターとの交流の中で望まれることとしては、「昨年度の受講者が学んだ内容を現場でどう活かしたかをオンライン等で聴くことができると循環性があるよいか」、「既に活動しているファシリテーターと一緒に活動する機会（先輩の活動を見る機会）があるとよい」という提案があった。

また、受講後の活動を把握するため、アンケート等によって継続的にモニタリングするという提案もあった。

- その他

事業を全国に広げるためには、「受講費用がかからない、行政職員が本務、兼務として受講できる等の仕組みが必要である」、「受講日を平日・休日の双方から選べるよう選択肢があると受講しやすい」といった意見があった。

6. ヒアリングを踏まえた養成方針

有識者・自治体ヒアリング結果を踏まえ、養成方針の論点について方針を検討した。

(1) 対象者

養成講座の対象者（受講者）に関しては、求める資質、専門性の要否、経験の有無等の条件をどのように設定するかについて、検討した。

実務経験については、こども・若者の意見を聞き反映することが重要であることから、ファシリテーション経験がなくても、こども・若者に関心がある者であれば対象とすることとした。

逆に、たとえファシリテーション経験がある、若しくはこども・若者と業務上関わる経験がある場合であっても、こども家庭庁が目指すこども意見ファシリテーターについての理念や共通認識を醸成する必要があること、こどもの権利の保護や安全・安心のために、こどもの権利やこどものセーフガーディングについて正しい知識を持っていること、こども・若者の特性を正しく理解し、こども・若者を対象としたファシリテーションのスキルを体系的・実践的に学ぶことが必要なことから、経験者か未経験者かを問わず、受講対象として想定することとした。

また、今後はこどもが自らファシリテーターとなることも十分想定されるが、その場合のプログラムは大人向けとは別に丁寧に検討・開発する必要があることから、本事業で開発するモデルプログラムの対象は18歳以上を想定した。ただし、17歳以下（高校生以下）のこども・若者がファシリテーターになることを妨げるものではない。

(2) 想定するファシリテーション場面

想定するファシリテーション場面に関しては、意見聴取・政策反映の対象フェーズ（政策・施策立案、実施、評価）、参加する子ども・若者の属性・年代（子ども・若者年代別、子ども・若者全体、多世代、参加者規模（少人数、大人数））、意見聴取の手法（対面、オンライン、ハイブリッド、チャット、XR）等について検討した。

意見聴取・政策反映の対象フェーズについては、政策・施策立案、実施、評価すべてが重要であることから、政策・施策立案、実施、評価すべてを想定することとした。参加する子ども・若者の属性・年代についても同様にすべての属性や年代において意見を聴くことが重要であることから、対象を限定しないこととした。

意見聴取の手法については、対面、オンライン、チャットを想定することとした。XR についても将来的には効果的な手法の一つとなることが想定されるが、まだ行政機関等において十分に実用化されていないことから、今回は検討の対象としないこととした。

また、有識者ヒアリングでは、直接的なファシリテーションスキル以外の内容である場のデザイン・企画運営等について充実させるべきとの意見もあったが、最低限押さえておくべきことを学ぶことを重視し、本事業では複数の子ども・若者と対話する場でのファシリテーション（グループファシリテーション）を担う人材を養成することをゴールとし、グループファシリテーションスキルに特化した内容としつつ、プログラムをコーディネートをする人の目的や動きについても理解できる内容とする方針とした。

一定の期間子ども・若者の活動に伴走し、意見を収束させて提言等にしていくようなプロジェクト伴走型ファシリテーションについては、学習範囲が広範になるためスキル習得対象としては扱わないが、ケース紹介は行うこととした。

(3) 主催者

主催者に関しては、国・自治体、民間事業者等について検討した。

全国で国や地域の行政機関や民間団体等が広く養成講座を開催することを想定するが、当面は国や地方自治体が主催して、必要に応じて民間事業者に委託して実施することを想定してプログラムを設計する方針とした。

(4) 子ども家庭庁、行政機関、民間事業者の役割分担

役割分担に関しては、主催と委託等について検討した。

上記(3)の方針から、子ども家庭庁やその他の行政機関が養成講座を主催し、必要に応じて民間事業者への委託により講座を実施することを当面は想定することとした。なお、子ども意見ファシリテーターの要件として子ども・若者の安全・安心を確保することが最低限必要であるため、委託先についても子どもの権利や子どもの安全・安心を守ることに十分な理解と経験を有していることが望ましい、という考え方をモデルプログラムに記載することとした。

(5) 講師

講師に関しては、人数や求める資質について検討した。

人数については、講師として活動できる人数は現時点では全国に多くないことが想定されるため、講師の数はメインの講師 1 名とそれを補助するサブ講師（10 人～20 人程度の講座の場合、2～3 名程度）、事務局として 2 名以上の実施体制を想定とする方針とした。

メインの講師に求める経験は、こども・若者を対象としたファシリテーションの十分な経験と養成講師経験のある団体や個人、サブ講師は講座の運営に携わった経験があり、こども・若者を対象としたファシリテーションの実践経験が豊富な人とした。NPO や大学等、こども・若者が参画する活動でファシリテーションを実践している団体のファシリテーターを想定した。

(6) 研修内容

研修内容に関しては、到達目標、経験者・未経験者別カリキュラムの要否、経験者・未経験者共通のカリキュラム、基礎編、応用編（内容、レベル、所要時間）、習得レベルと活動条件について検討した。

所要時間については、何時間・何日の講座とすべきかについて、事例等をみると数日間のカリキュラムのものもあり、今回学ぶべき内容は多いことから複数日のカリキュラムにすることも検討した。一方、できるだけ多くの方に受講してもらい、全国でスピーディーにこども意見ファシリテーターを養成するため参加しやすさを重視し、1 日講座（休憩含めて 8 時間）とすることを基本方針とした。

カリキュラムについて、個々の学習内容（スキルの内容）は主催者がカスタマイズすることが想定されるが、こども・若者の意見を政策に反映する文脈を重視し、「本講座のゴール」「オンデマンド学習の振り返り」「こどもの権利への理解」「こどものセーフガーディング」は必ず含める方針とした。また、現場で活躍できるファシリテーターを養成するためには、実践とセットで研修を考える必要があるため、研修を受けたあとにすぐ実践の場を用意することが望ましいことをモデルプログラムに記載する方針とした。

習得レベルについては、成長段階別の発達の違いを説明することは重要であるとの意見があったが、本モデルプログラムにおいては、より基礎的なこども・若者に共通するファシリテーションの内容とすることを重視したため、詳細な説明はしない方針とした。ただし、テキスト教材には、こどもの発達段階別の違いについて記載する方針とした。

(7) 研修方法

研修方法に関しては、個別型、集合型、座学、実践、一方向（オンデマンド）、双方向（対面、オンライン、ハイブリッド、XR）をどのように活用するかについて検討した。

オンデマンドで学べる内容の範囲について、テキスト教材の重要な点はオンデマンドでより分かりやすく、簡便に学ぶ環境が必要との意見があったため、オンデマンド教材を開発することとした。オンデマンド教材はテキスト教材の一部を講師が解説し、具体的なこども・若者が参加する対話の場面をイメージできる動画とする方針とした。

モデルプログラムは、「事前学習」と「集合型講座」で構成し、事前学習教材としてこども意見ファシリテ

ーターとして必要な単元を全て記載している「テキスト教材」と、要点を絞った「オンデマンド教材」を提供する方針とした。

(8) 研修後

研修後に関しては、活動支援・派遣方法、スキルアップ・専門分化について検討した。

スキルアップ・専門分化については、独立したファシリテーターとなることを目指すか、量的拡大を主眼として実践機会を得られるような準備を整えることを目指すべきか、大きく 2 つの方向性が考えられる。活躍の場が多岐に渡るため若者のエンパワメント、街づくり・地域課題解決、権利学習等の分野・テーマに特化していき、専門性を高めることも重要であるとの意見もあったが、こども家庭庁で実施すべきことはベースとなる者の養成であり、まずは汎用的な基礎スキルを持つ見習いファシリテーターを多く養成することを重視する方針とした。

7. 合同ヒアリング

(1) 実施方法

養成方針についてヒアリングを実施した後に、モデルプログラム及び教材案を開発した（開発経緯と内容は第 3 章、第 4 章を参照）。そのうえで、ヒアリングした有識者及び自治体担当者を対象に、開発したモデルプログラム及び教材案について改めて多角的な視点からの意見を聞き、試行的実施に向けた改善点を把握するため、合同のオンライン会議方式でヒアリングを実施した。

図表 2-14 合同ヒアリング実施概要

項目	内容
日時と対象者 (敬称略)	11/8 (水) 10:00～12:00 : 高井明子、竹内和雄、児童健全育成推進財団
	11/9 (木) 10:00～12:00 : 飯田一弘、角田将太郎
	11/17 (金) 10:00～12:00 : 磐田市、川崎市、竹本記子、山田真司
	11/17 (金) 14:00～15:00 : 朝山あつこ
資料	研修タイムライン (案)、テキスト (案)、モデルプログラム (案)
実施内容	1. 本事業について (研修の目的と狙い) 2. 自己紹介 3. モデルプログラムについて説明 4. 議論 ① 受講者向け : 事前学習教材としてのテキスト (案) ② 受講者向け : カリキュラム構成・内容、時間配分 ③ 主催者向け : モデルプログラムに記載すべきこと ④ 試行的事業について : 概要説明、検証ポイントについて意見交換

	5. 全体を通じた意見
--	-------------

(2) ヒアリング結果

テキスト（案）については、事前学習教材として読みやすく、重要な内容がまとまっているという概ね良好な評価であったが、全 80 ページを受講者があらかじめ読んでいと想定することは難しいこと、そのためテキストにメリハリをつける必要があること、逆に研修目的を踏まえて追記すべき内容について意見があった。

図表 2-15 テキスト（案）についての主な指摘事項と対応

指摘事項	対応	
読むための工夫	<ul style="list-style-type: none"> どこに重点を置いて読むべきかが分かりにくい テキストのサマリを作成することや事前に読むべき箇所を限定して伝えるとよい 講座で簡単なテストを実施する等、事前学習する意欲を出すための仕掛けがあるとよいのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> 各章にまとめを記載 オンデマンド動画をサマリ・必須の事前学習教材の位置づけとする 講座は振り返りからスタートすることを事前に告知することをモデルプログラムに記載
記載の充実	<ul style="list-style-type: none"> 研修を受けた後に読み返すという使い方が想定される。また、1 日の講座で研修するには学ぶべき内容が不十分なため、事前学習は必須であることをテキストに明記しておく必要がある 意見を聴く目的や意見を聴いた後のフィードバック等について、主催者とは別にファシリテーターが子どもに分かる言葉で直接伝える必要があることを明記するとよい 子どもの言葉の裏にある本音や経験を深掘りしできるような問いかけが重要 参加する権利だけでなく、子どもの権利について記載を厚くすべきである 	<ul style="list-style-type: none"> テキストや動画の使い方についてモデルプログラムに記載する グループファシリテーションの中で目的や意見表明後についてかみ砕いて子ども・若者に共有することを追記 コミュニケーションスキルのパートやよくある子ども・若者のシチュエーションと対応方法に追記 子どもの権利の記載を充実
活躍場面	<ul style="list-style-type: none"> 受講後の活躍場面を受講者がイメージできるよう、講座主催者、受講者ともに理解している必要がある ファシリテーションをすることも年齢やバックグラウンドが多様で幅があることが想定されることを記載しておくべきである 	<ul style="list-style-type: none"> 第 1 章に政策反映に向けた意見表明の支援であることを明確化
その他	<ul style="list-style-type: none"> ファシリテーターが実践時に確認すべきチェックリ 	<ul style="list-style-type: none"> チェックリストを作成する

	ストのようなものがあると有用	
--	----------------	--

カリキュラムや研修タイムライン（案）については、1 日講座という限られた時間を対面・集団学習だからこそできることにフォーカスする方針について賛同を得た。主に、より効果的な模擬会議の実施方法についての意見や、振り返りや関係構築の重要性について指摘があった。

図表 2-16 講座内容についての主な指摘事項と対応

	指摘事項	対応
模擬会議	<ul style="list-style-type: none"> • テーマやシチュエーション別にこども・若者に対するファシリテーション場面を追体験する、意見を言いたいこども・若者が集まった簡単な場面から意見を言わないこども・若者や配慮が必要なこどもが参加した場合等の対応が難しい場面にレベルアップする等、5 回をどういうテーマで行うかが非常に重要である • スマホ画面をずっと見ている、大人にボディータッチをしてくる、答えを求める等の対応を模擬会議で行うことも考えられる • 政策への意見反映の目的を踏まえると、意見のカテゴライズだけでなく、意見を施策に反映しやすく昇華させる等の「収束」が重要 • 5 人グループで 5 つの模擬会議を行うことで全員がファシリテーターを経験することも重要だが集中力の観点からは 4 回程度が妥当ではないか 	<ul style="list-style-type: none"> • モデルプログラムに複数回の設定例を記載 • テキストの「よくあるこどものシチュエーションと対応方法」に反映 • 「発散」の会議後に続きとして「収束」の会議を設定する • 5 人 5 回で試行した後に検証
事前学習の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> • 事前学習の振り返りは、こどもの権利等、最も重要な点に絞ることが考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> • 振り返りではなく、講義の時間に反映
関係構築	<ul style="list-style-type: none"> • 受講者同士の交流や関係性を構築する機会をつくり、受講後もつながることができるように 	<ul style="list-style-type: none"> • 講座中の交流・関係性構築の仕掛けを作る（対応済：アイスブレイク、ペアワーク・グループワーク、講座前・ランチタイムの声かけ等） • 受講後の方針はこども家庭庁で方針検討
講座の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> • 講座の最後の振り返りの対話の時間が重要なため、時間配分を増やすほうがよい 	<ul style="list-style-type: none"> • 模擬会議ごとの質問の時間を減らし、全体の振り返り時

	<ul style="list-style-type: none"> • 質疑応答の時間を設けることが望ましい • ファシリテーションについてどう考えるか、今後どう活動するか、内省するレポートを受講後に提出するようにしてはどうか 	間を増やす <ul style="list-style-type: none"> • 個人の振り返りの時間を設ける、参加者アンケートの質問項目とする
--	--	--

主催者向けのモデルプログラムに記載すべきこととして、到達目標や子ども意見ファシリテーターが体現すべき雰囲気づくりの追体験、受講後のフォローについて意見があった。また、モデルプログラムを活用するためのサポートが必要という指摘があった。

図表 2-17 モデルプログラムについての主な指摘事項と対応

指摘事項		対応
目標	<ul style="list-style-type: none"> • 講座の到達目標やあるべき姿を、ナレッジ、スキル、アティテュードの3つの観点から言語化できるとよい 	<ul style="list-style-type: none"> • チェックリストの項目で対応
雰囲気づくり	<ul style="list-style-type: none"> • アイスブレイク、会場の設営、ドレスコード等による雰囲気づくりの必要性について、養成講座自体が子ども・若者に意見を聴く場の追体験となることを主催者が知っておくとよい 	<ul style="list-style-type: none"> • 「研修の狙い」に追記
講師	<ul style="list-style-type: none"> • 講座を実施する講師を探すことに主催者が苦労することが想定される。ファシリテーターだけでなく、社会教育士等、他の有資格者と連携することも考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> • 子ども家庭庁が特定の個人・団体を紹介することは難しいため、講師に求める人材像や該当例を記載
サポート	<ul style="list-style-type: none"> • 自治体の事務局経験によりモデルプログラムを使いこなせるかが異なることが想定される。実践例の明示やQA、研修実施等が望ましい 	<ul style="list-style-type: none"> • 試行的事業を踏まえたノウハウに基づき「講座運営ガイド」の節を設ける
受講後	<ul style="list-style-type: none"> • 講座で学んだとしても現場での状況判断や観察が必要になるため、実践の場でつまづくことが想定されることは受講者に伝えておくことよい • 受講証の発行、受講者のリストの管理、ファシリテーション機会の提供方法等について講座の主催者は事前に検討しておく必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> • 講座のチェックアウト時に講師から伝える、主催者から実践機会があればその際に案内する • 受講証の発行等は「講座終了後のフォロー」に望ましい実施事項として記載
その他	<ul style="list-style-type: none"> • 今後、地方自治体や民間団体等が講座を主催することが考えられるため、主催者の質の担保方法について検討したほうがよい 	<ul style="list-style-type: none"> • 今後の検討事項とする

試行的事業で試行する講座について、受講対象や進行方法、検証事項について意見があった。

図表 2-18 試行的事業についての主な指摘事項と対応

指摘事項		対応
対象	<ul style="list-style-type: none"> • 未経験者と経験者の双方を対象に実施し、それぞれの立場から意見を聴くとよい 	<ul style="list-style-type: none"> • 募集要項に反映
進行	<ul style="list-style-type: none"> • 参加者の立場と評価者の立場が混じることが想定される。検証時間は最後に設けていること、それまでは参加者に徹してほしい旨を講座の冒頭で明確に伝えるほうがよい • 受講中の気づきは付箋等に随時メモできるようにすることが考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> • 試行的事業の設計に反映
検証事項	<ul style="list-style-type: none"> • 事前学習教材について、実際にどの程度読んだかを確認する • 対面とオンラインの違いを検証できるようにしたほうがよい • 受講後にどのような変化があったかを検証できるとよい 	<ul style="list-style-type: none"> • 参加者アンケートに反映

第3章. モデルプログラムの開発

1. 開発目的

モデルプログラムとは、国や地域（行政機関や民間団体等）が主催者となり、こども意見ファシリテーター養成をするためのモデルとなるプログラムであり、学習の狙いやカリキュラム、研修教材で構成される。

こどもや若者の意見表明の場に当たり前にファシリテーターがいる状態が、特定の地域ではなく全国的に実現されるよう、広く養成されることを目指し、行政機関や民間団体等が主催者となってファシリテーター養成講座を開催することを支援する目的で開発した。

モデルプログラムは、各主催者がカリキュラムや運営方法を検討するにあたり参考とすることを想定しており、活用方法は、以下のいずれかのパターンが考えられる。

- ① モデルプログラムや教材をそのまま活用して講座を開催する。
- ② モデルプログラムや教材の要素を活かし、独自にカスタマイズして講座を開催する。

なお、②の活用方法において、講座の品質を担保するため、「学習内容」自体の変更は認めないが、ワークの種類ややり方など「学習の方法」についてカスタマイズできることを想定した。カスタマイズせずそのまま活用することを想定する箇所には、テキストで「必須・変更不可」と記載した。

2. 想定利用対象

こども意見ファシリテーターを様々な場面で養成する国や地域（行政機関や民間団体等）の主体を対象としている。

3. 開発方法・工程

モデルプログラムは、①養成方針の決定→②骨子の作成→③モデルプログラム案の作成→④合同ヒアリング・試行的事業での検証結果の反映の流れで開発した。

① 養成方針の決定

養成方針案に対する有識者や自治体意見に基づいて、こども家庭庁及び FTCJ と協議の上で各論点について養成方針を決定した。

② 骨子の作成

教材作成と並行して、モデルプログラムの骨子案を提示し、こども家庭庁からのフィードバックを得て作成した。

③ モデルプログラム案（α版）の作成

骨子を基に、ひとつおりのモデルプログラムを作成した。

④ 合同ヒアリング・試行的事業での検証結果の反映

ヒアリング対象者（自治体・有識者）等にα版を提示し、合同ヒアリングを行った後にβ版を作成。試行的事業において①研修運営側の自己評価、②参加者アンケートによる客観評価を実施した結果を反映して、モデルプログラム案第1版を作成した。

4. モデルプログラムの考え方、工夫したポイント

モデルプログラムは、18歳以上を対象に、主として対面やオンラインで複数のこども・若者と対話する場におけるグループファシリテーターを養成することを目的としており、受講後に他の独立したファシリテーターがいる場であれば、ひとつおりのファシリテーターを務めることができることを目指している。

こども・若者と接する業務に従事したことない者や、ファシリテーターの経験がない未経験者も含めて多くの人が受講し、実践の場に出ていくための準備ができることが、こども意見ファシリテーター養成の主題であるため、本プログラムに基づくこども意見ファシリテーター講座の受講者は、最低限、図表 3-1 を身につけることを想定している。ただし、あくまでミニマムラインであり、受講者に最終的に目指してほしいゴールではない。

図表 3-1 受講者が最低限身につけること（ミニмумライン）

こども	こどもに害を与えないという最低限を守ることができる
意見	「こどもが政策についての意見を言う」というこども意見ファシリテーターの人物像イメージを自分なりに言語化できる
ファシリテーター	ファシリテータースキルを理解し、基本的なやり方についてひととおり学んでいる ※必要なスキルの一覧は、本プログラムに含む教材にて「チェックシート」として示す。

モデルプログラムにおける研修の全体構成は下記の通りである。事前学習と講座受講をもって、経験者のスーパーバイズのもとでファシリテーションの実践の場に出られることを想定した。事前学習をし、講座を受講したことにより「受講証」を各講座主催者が発行することを想定する。

図表 3-2 研修の全体構成

	事前学習	講座
学習の狙い・学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 当日講座は時間が限られるため、ワーク中心の内容としています。 ■ そのため、知識として学ぶ必要がある内容については、受講者が各自で事前に学習しておくことを求めています。 <p>(主な学習内容)</p> <p>※基礎編・応用編共通</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 「こども・若者ファシリテーションがなぜ重要なのか？ ✓ こども・若者の安全・安心を確保するための方法 <p>※基礎編のみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ ファシリテーターが担うべき役割とは？ ✓ ファシリテーションの具体的シーン ✓ ファシリテーションにおける基礎的スキル（傾聴力、場のデザインなど） など 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 基礎編は終日、応用編は半日の集合型の研修。知識を学ぶことよりも、学んだ内容の「振り返り」や、参加者同士の対話を伴う「ワーク」を中心とし、学習内容の自己理解を深め、実践力を養うことを目的とします。 <p>(主な学習内容)</p> <p>※基礎編は、スキルの学習と基礎的な模擬会議による演習、応用編は、より複雑なパターンでの模擬会議を実施します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 傾聴力（アクティブリスニングスキル）…アイコンタクト・あいづち・相手に合わせる・オウム返しなど ✓ 質問力…質問を通じて噛み砕いていく技術、相手の状況に合わせて質問を投げかける技術など ✓ 模擬会議（1組4～5人で、こどもを想定した会議のファシリを体験し、振り返りを行う） など
使用する教材・学習方法	<p>オンデマンド教材 (ネット上でオンラインで視聴可能)</p> <p>テキスト教材</p> <p>オンデマンド教材は、テキスト教材の一部を講師が解説したり、具体的なこどもが参加する対話の場面（イメージビデオ）を流したりする内容。</p>	<p>対面講座 ※同一会場に受講者が集合</p> <p>オンライン講座 ※オンライン会議の環境に受講者が参加</p> <p>教材は、事前学習で用いたテキスト教材に加えて、当日投影するスライド資料、配布するワークシートを用います</p>

タイムラインは、1日8時間の講座プログラムとスケジュールを示したものである。知識として学ぶべき点については、原則「テキスト教材」、「オンデマンド教材」で事前に学習する前提で、ワーク中心にプログラムを構成した。

特に、「実践」と「振り返り」を繰り返すことでファシリテーションスキルは向上するという考え方から、講座の後半は「模擬会議」を中心に置いて、多くの時間を使う構成である。

オンライン研修のプログラム構成も、基本的には対面研修と同じである。ただし、うなぎ等オンラインで

はより重要な点についてはスキルの学習の際に、オンラインファシリテーションのコツを対面研修よりも少し手厚く学習する内容とした。

図表 3-3 対面講座のプログラム（講座試行時）

経過時間	時間配分	実施方法	項目	内容	内容詳細
0:00	0:20	—	イントロダクション	・本講座のゴール、自己紹介、アイスブレイクなど	・政策提言に関して、子どもが当事者となり参画する会議の場、にファンリとしてかわる目線合わせを入れ込む ※社会の仕組みを説くといった行為にならないよう伝える
0:20	0:20	ワーク	振り返り	・感想を述べ、自分自身のバイアスに気づいたり、子どもファシリテーションで気を付けるべき点を学んでいく	・オンデマンド学習の振り返り10分 →どの部分に興味を持ったか？それぞれ興味が変わったことをワークを通して体感してもらおう。 ・ビデオについて感想共有 10分
0:40	0:30	講義	研修の流れと頭出し 内容把握と、子どもと関わるうえで必ず理解してもらいたいことの確認。	・場のデザインのスキル：場の雰囲気づくり、話し合いの進め方 ・対人関係のスキル：聴くことが安心感、信頼感を与える、質問の使い分け ・構造化のスキル：主張を明確にする、議論の全体像をつかむ、議論を書きとめるなど	・スキル→目次的に紹介、実践していきますと宣言 ・今回学ぶファシリテーションについて ・前提となる姿勢：子どもの権利への理解 ・場づくり→セーフスペースは実際に取り組む。 セーフガーディングの要素は必ず入れる。
1:10	0:10	ハツファ		(開始時間や人数に合わせてここで時間調整)	
1:20	0:10	休憩			
1:30	0:30	講義 +ワーク	基礎的スキル①	・アクティブリスニングスキル（アイコンタクト・あいづち・ベISING・オウム返しなど）	・要素確認 5分 ・2人でワーク：(4分ワーク+1分感想) ×4=20分 ・質疑応答 5分
2:00	1:15	講義 +ワーク	基礎的スキル②	・質問力（質問の種類と意図、チャンクダウン、参加者同士を繋げるなど）	・要素確認 5分 ・2人でワーク： チャンク ペア6分ワーク+1分感想 10分 新しい視点 30分 パス回し 4人16分ワーク+ハツファ4分 20分 ・質疑応答10分
3:15	0:15	振り返りorハツファ		午前の振り返り（予備時間）	・時間が押していれば省略可能
3:30	1:00	お昼休憩			

経過時間	時間配分	実施方法	項目	内容	内容詳細
4:30	0:15	ワーク		・アイスブレイク	2個程度
4:45	0:20	講義		・話し合いの進め方、振り返りのステップ（どのように話を始めるのか、介入、観察の具体的手法、振り返りのステップの重要性、次につなげるための工夫など）	・動画あるとイメージ湧きやすいかも →オンデマンドで見せておく →切り抜きつつ説明する
5:05	0:25	ワーク	模擬会議①（5人）	同上	・メモの取り方 ・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分→※時間押している場合は2回に1回
5:30	0:25	ワーク	模擬会議②（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
5:55	0:10	休憩			
6:05	0:25	ワーク	模擬会議③（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分→※時間押している場合は2回に1回
6:30	0:25	ワーク	模擬会議④（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
6:55	0:10	休憩			
7:05	0:25	ワーク	模擬会議⑤（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
7:30	0:20	ワーク	振り返り	・今日一日の振り返り	・印象に残ったこと、学び 15分 ・これから心がけていきたいこと（行動ベース） 5分
7:50	0:10	講義	まとめ	・アナウンスなど	
8:00			終了		

図表 3-4 オンライン講座のプログラム（講座試行時）

経過時間	時間配分	実施方法	項目	内容	内容詳細
0:00	0:20	-	イントロダクション	・本講座のゴール、自己紹介、アイスブレイクなど	・政策提言に関して、子どもが当事者となり参画する会議の場、にファンリとしてかわる目線合わせを入れ込む ※ 社会の仕組みを説くといった行為にならないよう伝える
0:20	0:20	ワーク	振り返り	・感想を述べ、自分自身のバイアスに気づいたり、子どもファシリテーションで気を付けるべき点を学んでいく	・オンデマンド学習の振り返り10分 →どの部分に興味を持ったか？それぞれ興味が違うことをワークを通して体感してもらおう。 ・ビデオについて感想共有 10分
0:40	0:30	講義	研修の流れと頭出し 内容把握と、子どもと関わるうえで必ず理解してもらいたいことの確認。	・場のデザインのスキル：場の雰囲気づくり、話し合いの進め方 ・対人関係のスキル：聴くことが安心感、信頼感を与える、質問の使い分け ・構造化のスキル：主張を明確にする、議論の全体像をつかむ、議論を書きとめるなど	・スキル→目次的に紹介、実践していきますと宣言 ・今回学ぶファシリテーションについて ・前提となる姿勢：子どもの権利への理解 ・場づくり→セーフスペースは実際に取り組む。 セーフガーディングの要素は必ず入れる。
1:10	0:10		バツファ	(開始時間や人数に合わせてここで時間調整)	
1:20	0:10		休憩		
1:30	0:30	講義 +ワーク	基礎的スキル①	・アクティブリスニングスキル（アイコンタクト・あいづち・ベISING・オウム返しなど）	・要素確認 5分 ・2人でワーク：（4分ワーク+1分感想）×4=20分 ・質疑応答 5分
2:00	1:15	講義 +ワーク	基礎的スキル②	・質問力（質問の種類と意図、チャックダウン、参加者同士を繋げるなど）	・要素確認 5分 ・2人でワーク： チャック パア6分ワーク+1分感想 10分 新しい視点 30分 パス回し 4人16分ワーク+バツファ4分 20分 ・質疑応答10分
3:15	0:15		振り返りバツファ	午前の振り返り（予備時間）	・時間が押ししていれば省略可能
3:30	1:00		お昼休憩		

経過時間	時間配分	実施方法	項目	内容	内容詳細
4:30	0:15	ワーク		・アイスブレイク	2個程度
4:45	0:20	講義		・話し合いの進め方、振り返りのステップ（どのように話を始めるのか、介入、観察の具体的手法、振り返りのステップの重要性、次につなげるための工夫など）	・動画あるとイメージ湧きやすいかも →オンデマンドで見ておく →切り抜きつつ説明する ・メモの取り方
5:05	0:25	ワーク	模擬会議①（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分
5:30	0:25	ワーク	模擬会議②（5人）	同上	・全体質問FB 7分→※時間押している場合は2回に1回 ・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
5:55	0:10		休憩		
6:05	0:25	ワーク	模擬会議③（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分→※時間押している場合は2回に1回
6:30	0:25	ワーク	模擬会議④（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
6:55	0:10		休憩		
7:05	0:25	ワーク	模擬会議⑤（5人）	同上	・メイン1名、メモ1名、参加者3名 ・会議 15分 ・グループ内FB 3分 ・全体質問FB 7分
7:30	0:20	ワーク	振り返り	・今日一日の振り返り	・印象に残ったこと、学び 15分 ・これから心がけていきたいこと（行動ベース） 5分
7:50	0:10	講義	まとめ	・アナウンスなど	
8:00			終了		

本事業では、モデルプログラムを開発したほか、講座主催者が養成講座を開催しやすくなるための工夫として「子ども意見ファシリテーター養成講座開催ガイド」を作成した。「モデルプログラム」に加えて、「プログラムの狙い・目的」、「講座主催者の実施要領」、「講座運営ガイド」、「プログラム評価」で構成される。（図表 3-5）

図表 3-5 養成講座開催ガイドの構成

目次	概要
本プログラムの	・ はじめに

狙い・目的	<ul style="list-style-type: none"> • こども意見ファシリテーター養成の必要性 • 全国的なこども意見ファシリテーターの養成方法と講座開催ガイドの位置づけ • 本講座開催ガイドのスコープ（範囲）
講座主催者の実施要領	<ul style="list-style-type: none"> • 講座主催者が、具備すべき要件 • 開催前～開催～開催後の全体の流れ • 実施体制、講師選定
モデルプログラム	<ul style="list-style-type: none"> • モデルプログラムの活用方法 • 養成したい人材の想定 • 受講者に最低限身に付けてほしいこと（ミニマムライン） • 受講対象者の想定 • 講座の種類（基礎編、応用編） • プログラムの構成 • 各単元で万でほしいこと・学習の狙い • 教材の構成、教材に含まれるコンテンツ • 講座のタイムライン①対面講座 • 講座のタイムライン②オンライン講座
講座運営ガイド	<p>（事前）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 事前学習教材・オンデマンド教材の使い方 <p>（当日）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 当日研修の実施要領（対面講座） • 当日研修の実施要領（オンライン講座） • 講座実施において気をつけるべき点 • よくあるトラブルと対応策の例 • 講師スライドの活用方法 <p>（事後）</p> <ul style="list-style-type: none"> • 受講者を「実践の場」へ送り出すために • 「実践の場」での経験を踏まえたスキル向上等のサポート
プログラム評価	<ul style="list-style-type: none"> • プログラムの評価・改善の仕組みと方法 • 評価項目の例 <p>（参考）教材の入手方法、教材サンプル</p>

第4章. 講座実施に必要な教材等の作成

1. テキスト教材の作成

(1) 位置づけ

養成講座は限られた時間で効果的な学習とするため、ワーク中心の内容としている。このため、知識として学ぶ必要がある内容についてテキスト教材としてまとめた。

(2) 想定対象者・想定する使い方

受講者が各自で事前に学習することや、受講後の振り返りに活用することを想定している。

(3) 作成方法・工程

教材は、こども・若者の権利を守る活動に取り組み、こども・若者向けファシリテーター養成の実績を持つ FTCJ を再委託先として、全国の自治体、学校、団体向けに実施している研修のアイスブレイク、講義、実践ワーク等、様々な実践経験やノウハウを本事業及びこども家庭庁の趣旨に合わせて作成した。

教材は、①養成方針の決定→②骨子の作成→③教材案の作成→④合同ヒアリング・試行的事業での検証結果の反映の流れで開発した。

① 養成方針の決定

養成方針案に対する有識者や自治体意見に基づいて、こども家庭庁及び FTCJ と協議の上で各論点について養成方針を決定した。

② 骨子の作成

プログラム案作成と並行して、教材の骨子案を提示し、こども家庭庁からのフィードバックを得て作成した。

③ 教材案（α版）の作成

骨子を基に、ひとつおりの教材を作成した。

④ 合同ヒアリング・試行的事業での検証を経ての修正

ヒアリング対象者（自治体・有識者）にα版を提示し、合同ヒアリングを行った後にβ版を作成。試行的事業において、当該教材を用いた研修を実施し、①研修運営側の自己評価、②参加者アンケートによる客観評価を実施した結果を加味し、教材案第1版を作成した。

(4) 基本的な考え方、各項目の狙い、工夫したポイント

ヒアリングや自治体視察から得られた、実践と振り返りが重要であるという点を考慮し作成した。「はじめに」、「ファシリテーション全体像」、「コミュニケーションスキル」、「話し合いの進め方」、「演習」、「振り返り」、「様々な場面に対応する」の章より構成されており、こども意見ファシリテーターを養成するにあたって、網羅的な内容としている（図表 4-1）。講座当日に「振り返り」のためにも使用できる構成とした。

図表 4-1 テキスト教材の目次（講座試行時）

目次	
1章 はじめに	3
1. こども家庭庁が目指す社会	3
2. 本事業の位置づけ	5
3. ファシリテーターに求める資質	8
4. 想定するファシリテーション場面	10
1章のまとめ・確認	12
2章 ファシリテーション全体像	13
1. こどもへのファシリテーション	14
2. こども意見ファシリテーターの基本姿勢	18
3. 場づくり(チェックイン)	23
2章のまとめ・確認	28
3章 コミュニケーションスキル	29
1. ファシリテーターのコミュニケーションスキルとは	29
2. 傾聴力	31
3. 質問力	41
4. グループで会話をする	48
3章のまとめ・確認	49
4章 話し合いの進め方	50
1. 効果的な話し合いのステップとは	50
2. 場の終わらせ方(チェックアウト)	54
4章のまとめ・確認	55
5章 演習	56
こんな時どうする？ 一対面編一	56
解説 こんな時どうする？ 一対面編一	59

こんな時どうする? —オンライン編—	62
6章 振り返り	64
7章 様々な場面に対応する	65
1. よくあるこどものシチュエーションと対応方法	65
2. メモや板書の必要性、やり方とコツ	69
3. 共有・発表のしかた	71
4. オンラインのファシリテーションのポイント	72
5. セーフガーディングポリシーに反する人を見つけた際の対応について	77
6. アイスブレイク集	78

各章の狙いと内容についての概要を以下に記載する。

1章. はじめに

こども基本法の理念を基に、こども・若者の意見聴取がなぜ必要なのかを理解するため、理念の説明に加えて、同法第 11 条こどもや若者の意見を反映するために必要な措置を講じることが国や地方公共団体の義務となっていることや、こどもの意見を反映する意義や必要性等、根拠となる要素を理解できる内容とした。

意見聴取のシーンを理解することで、自身が関わるときに幅広いイメージを持つことが必要なため、政策決定プロセスにおいて、様々なこども・若者との関わり方（こども・若者参画のパターン）について具体例を紹介している。

また、こども・若者がどのような存在か（こども観）を理解し、こども・若者の意見を聴くためのファシリテーターの役割について確認しておく必要があるため、意見聴取・意見反映のシーンにおいて、ファシリテーターが関わる意義について解説している。

こども・若者の意見を聴くためのファシリテーターに求める資質（バイアスを持たない、等）は、こども・若者と関わるうえでとても重要な前提になるため、具体的なファシリテーションの方法論やスキルの習得は次章以降解説していくが、次章に入る前に、資質の部分を理解できる内容とした。

2章. ファシリテーション全体像

ファシリテーターに求められる役割と、スキルを確認する必要があるため、「外面的スキル」と「内面的スキル」についての内容を記載した。中でも、こども意見ファシリテーターは特に内面的スキルが重要であることを記載している。

ファシリテーションを行う場面を理解する必要があるため、主に 4 つの型に分かれていることを記載し、それらの場を円滑に進めるために、①情報の「共有」、②意見の「発散」、③意見の「収束」の 3 つのステッ

プに則り進めていくのが基本であることを記載している。

こども意見ファシリテーターは、こども・若者と対等な関係で、その特性にあわせて柔軟に対応するファシリテーションが求められているため、理想的なファシリテーターと、理想的ではないファシリテーターの例を見ながら、イメージをつかめる内容とした。

こども・若者の安全・安心な意見表明を実現するために、こども意見ファシリテーターとして必ず頭に入れておくべき姿勢を解説する必要があるため、こどもの権利、こどものセーフガーディング、ウェルビーイング、こどもの成長段階別の発達の違いへの理解についての内容を重要視した。

事前の場の設計や、雰囲気づくりを含めた「場づくり」が場の成果のカギを握るため、目的や情報の共有、会場レイアウト、アイスブレイク（雰囲気づくり）、グラウンドルール等、実践的に使えるように具体例を参考に、実際の場をイメージできる内容とした。

3章. コミュニケーションスキル

ファシリテーターのコミュニケーションの大前提は、好奇心を持って聴くこと、話してくれたことに感謝をすることである。

そのうえで、こども・若者が安心して思う存分話することができるよう、今まで無意識に行っていたことも、学んだ内容を意識しながら実践していく必要があるため、「傾聴力」と「質問力」のスキルを学べる内容とした。

「傾聴力」は、あなたの話を聴いていますと意識的に示す（アイコンタクト、あいづち・うなずき、相手に合わせる、「もっと聞かせて」を言葉で伝える）こと、言葉以外の部分も受け取る（様子を観察し、相手の状態に気づく）こと、判断しないで聴く（自分の意見や考えは、全部ヨコに置いておく）ことを重視した。

「質問力」は、言葉の本当の意味を知る（分からない言葉の意味は、勝手に判断せず本人に直接聴く）こと、相手の状況に合わせて投げかける（クローズドクエスションとオープンクエスション）こと、効果的な質問を投げかける（質問の目的を意識する）ことを重視した。

またグループで会話をする場面についてもスキルとして必要なため、一对一の会話にならないように気をつけることも記載をした。

4章. 話し合いの進め方

第2章で紹介した、場を円滑に進めるための3つのステップ①情報の「共有」、②意見の「発散」、③意見の「収束」について、話し合いの進め方が学べる内容を記載した。

情報の「共有」として、お互いが知っていること（情報）を共有したり、分からないことがないか確認したりすることが大切である。そのために、参加者が発言できる機会を多くして、場の雰囲気づくりにもつなげる必要がある。クローズドクエスションを多めにして、テンポをつくっていくのも有効な方法であることを記載した。

意見の「発散」について、共有された「情報」を基に、「みんなにとってどうか」という視点を入れて意見を出してもらうことを中心に考えておくと、議論が建設的になる。意見の理由や背景も共有したり、曖昧な言葉に対して言葉の意味や情報を、質問を通じて噛み砕いていく（チャンクダウン）等を行うことで、具体的な論点が見えてくる。たくさん意見がでてくるよう視野を広げられるよう様々な角度からの問いかけ

を行うことを記載した。

意見の「収束」について、アイデアを整理したり、合意形成をしたり、結論を導いて場を収束させ、区切りをつけることが大切であること、具体的なアクションを考えることで、議論した内容がより自分ゴト化され、前向きに場を「収束」させることができることを記載した。

また、場の終わらせ方（チェックアウト）では、あくまで今日参加してみてどうだったのか、話し合いを終えての状態はどうか、ということについて話すことについて記載した。

5章. 演習

対面編とオンライン編において、演習内容も変わることより、それぞれ演習を作成した。また気になるポイントの解説や声かけの例も記載し、理解を深められる内容とした。

6章. 振り返り

丁寧に自分を見つめ、自分と対話することが必要なため、テキストで学んだことを基に振り返ってみる振り返り用のページを用意した。改めて大切にしていきたいと思ったこと、今後、気をつけていきたいと思ったこと、『こどもまんなか社会』にしていくため、自分ができることを考える内容としている、

7章. 様々な場面に対応する

上記の内容以外にも様々な場面に対応することが必要であるため、よくあるこども・若者のシチュエーションと対応方法、メモや板書の必要性、やり方とコツ、共有・発表のしかた、オンラインのファシリテーションのポイント、こどものセーフガーディングに反する人を見つけた際の対応について、アイスブレイク集についての内容も記載している。アイスブレイク集では、自己紹介系、相手を知る、ゲームについて記載をしている。

2. オンデマンド教材（動画）の作成

(1) 位置づけ

オンデマンド教材（動画）は、テキスト教材の中で特に受講者に事前に学習してほしい内容について講師が解説し、こども・若者が実際に参加してファシリテーションを行う場面について、イメージを持つために作成した。

(2) 想定対象者・想定する使い方

全受講者を対象に、下記の使い方を想定している。

- 隙間時間で事前学習を進める
- 経験に応じて視聴速度を変えて効率的に学習する
- テキストの記載内容の理解を深める
- こども・若者向けのファシリテーションのイメージを持った上で講座に臨む

(3) 作成方法・工程

オンデマンド教材は、①オンデマンド教材の編成方針の決定→②撮影→③編集・確認の流れで作成した。

① オンデマンド教材の編成方針の決定

動画を作成する単元、動画の形式、撮影方法、編集方針、本数・時間等、最初に決めておくべき事項について、こども家庭庁と協議し決定した。

② 撮影

オンラインの録画を行った。(原則カメラ 1 台で、固定で撮影)

③ 編集・確認

撮影した動画データをもとに、編集を行った。編集案について、こども家庭庁のフィードバックを得て反映した。

(4) 基本的な考え方、各項目の狙い、工夫したポイント

多くの人が必要最低限の知識を身につけることを主目的とし、座学での利用が想定されるため、動画は重要項目のみとする。視聴のしやすさを考慮し分割して作成した。

動画は、①はじめに、②こどもの権利、こどものセーフガーディング、③コミュニケーションスキル前編（傾聴力）、④コミュニケーションスキル後編（質問力）、⑤こども意見ファシリテーターのイメージをつかもう、の 5 つを作成した（視聴時間合計 2 時間 4 分 59 秒）。①～⑤について、動画のセクションごとの内容を図表 4-2 に記載する。

図表 4-2 動画の各セクション概要

① はじめに (5 分 31 秒)
<ul style="list-style-type: none">・ こども家庭庁の設立とこどもまんなか社会に向けて・ なぜ意見を聴くことが大事なのか・ 本事業の目的 こども意見ファシリテーターとは・ こども意見ファシリテーターに活動していただく場面
② こどもの権利、セーフガーディング (4 分 32 秒)
<ul style="list-style-type: none">・ こどもの権利 こどもの権利とは？ 4 つの柱と条約・ こどものセーフガーディングの考え 具体的な行動
③ コミュニケーションスキル前編（傾聴力） (15 分 34 秒)
<ul style="list-style-type: none">・ 傾聴力とは・ アイコンタクト・ あいづち・ 相手に合わせる（ペーシング）・ 声の調子や呼吸を合わせる(マッチング)・ 動きを合わせる(ミラーリング)

<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉をくり返す (バックトラッキング・オウム返し) ・ あいづちのまとめ ・ 言葉以外も受け取る (キャリブレーション) ・ 判断しないで聴く
④ コミュニケーションスキル後編 (質問力) (10分 49秒)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 質問力とは ・ あいまいな言葉を明確にする(チャンクダウン) ・ クローズド・クエスチョンとオープン・クエスチョンの使い分け ・ グループで会話をする
⑤ こども意見ファシリテーターのイメージをつかもう (1時間 28分 33秒)
<ul style="list-style-type: none"> ・ アイスブレイク：基本の自己紹介 ・ アイスブレイク：しりとり自己紹介 ・ アイスブレイク：コールキャッチボール ・ アイスブレイク：オンライン・テーマトーク例 ・ アイスブレイク：オンライン・もので自己紹介 ・ 安心の場づくり ・ 意見聴取 例 1『理想のこどもの居場所』 ・ 意見聴取 例 2『廃校の活用方法』 ・ 意見聴取 例 3『デザインについて』 ・ 場の終わらせ方 ひとこと感想／今の気持ち

第5章. 試行的研修の実施

1. 目的

本調査研究で作成したモデルプログラム案及び教材案 (β版) に基づいて、こども意見ファシリテーターを養成する研修を試行し、プログラムや教材の内容について検証することを目的に、「こども意見ファシリテーター養成講座」を2023年12月18日(月) (対面講座) 及び12月19日(火) (オンライン講座) に実施した。

2. 実施概要

(1) 受講対象

検証目的のため、受講者は、ファシリテーション経験、こども・若者と日常的に関わる経験、こども意見ファシリテーションの経験の有無に関わらず、双方を対象とした。

(2) 募集方法

募集方法は、こども意見ファシリテーター養成講座の体験モニターを募集する案内を作成し、ヒアリングに協力したことで本事業の趣旨を理解している有識者・自治体に周知を依頼した。モデルプログラム案で想定している受講方法と規模を前提に、対面、オンラインそれぞれ 20 名ずつ募集した。

実施場所は、対面講座は遠方からの参加者を想定して、アクセスのいいこども家庭庁とした。オンライン講座は、講師や事務局が柔軟に対応しやすい受託者の会議室から講師が進行した。

定員を上回る申込があったものの、業務上・家庭の都合によるキャンセルがあり、結果的に対面講座 23 名、オンライン講座 15 名の合計 38 名が参加した。

図表 5-1 講座募集案内チラシ

準備中のこども家庭庁の養成講座をより良くするために力を貸してください！

こども意見 ファシリテーター 養成講座

体験モニター
募集！



日時/場所

① 2023 年 12 月 18 日 (月) : 会場
(〒100-6090 東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング14階 こども家庭庁大会議室)

② 2023 年 12 月 19 日 (火) : オンライン

時間

午前9時～午後6時
※午後0時～午後1時はお昼休憩です
※午後5時～午後6時は講座後の意見交換会の実施を予定しています。

講師

認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

受講料

無料

募集人数

①会場20名、②オンライン20名
※応募者多数の場合は抽選といたします
(年代やご経験に応じて調整させていただきます)
※会場参加の方で希望する方には交通費をお支払いします(上限2万円)

講座内容

傾聴力と質問力を磨き、模擬会議を通してこどもの意見を引き出すファシリテーションを学ぶ。
養成講座は、事前学習の教材(一部オンデマンドあり)を前提につくられた演習講座です。
教材は、こどもを対象にしたファシリテーターが求められる背景、こども意見表明ファシリテーターとは何かといった概念をはじめ、ミニワークや演習を通して、ファシリテーションスキルを丁寧に学べる内容になっています。

応募条件

- ① 18歳以上
- ② 事前学習教材を学習すること
(教材及びオンデマンド教材(約3～4時間))
- ③ 講座に1日参加すること
- ④ 講座受講後の意見交換会に参加すること(同日午後5時～6時)
- ⑤ 講座終了1週間以内に、アンケートに回答すること

応募期間

2023年11月1日(水)
～11月24日(金)

応募方法

申込フォームから
ご応募ください。



こども意見表明ファシリテーターは、こどもの意見が「聴かれ、尊重される社会」に向けて、国や地方自治体がこどもの意見を聴く場において、こどもが意見を言いやすい環境や雰囲気をつくり、こどもが意見を伝えるサポートをする役割を担います。こども家庭庁が養成講座のモデルプログラムを作成して全国的な養成を支援します。

主催

株式会社NTTデータ経営研究所

本講座は、ファシリテーター養成プログラム作成のための調査研究(こども家庭庁委託事業)の一環で、NTTデータ経営研究所がフリー・ザ・チルドレン・ジャパンと連携して実施しています。

問い合わせ先

Email: miuras@nttdata-strategy.com
Tel: 09016053078
【対応時間 9:30～17:00】
担当: 三浦、小林

(3) 実施方法

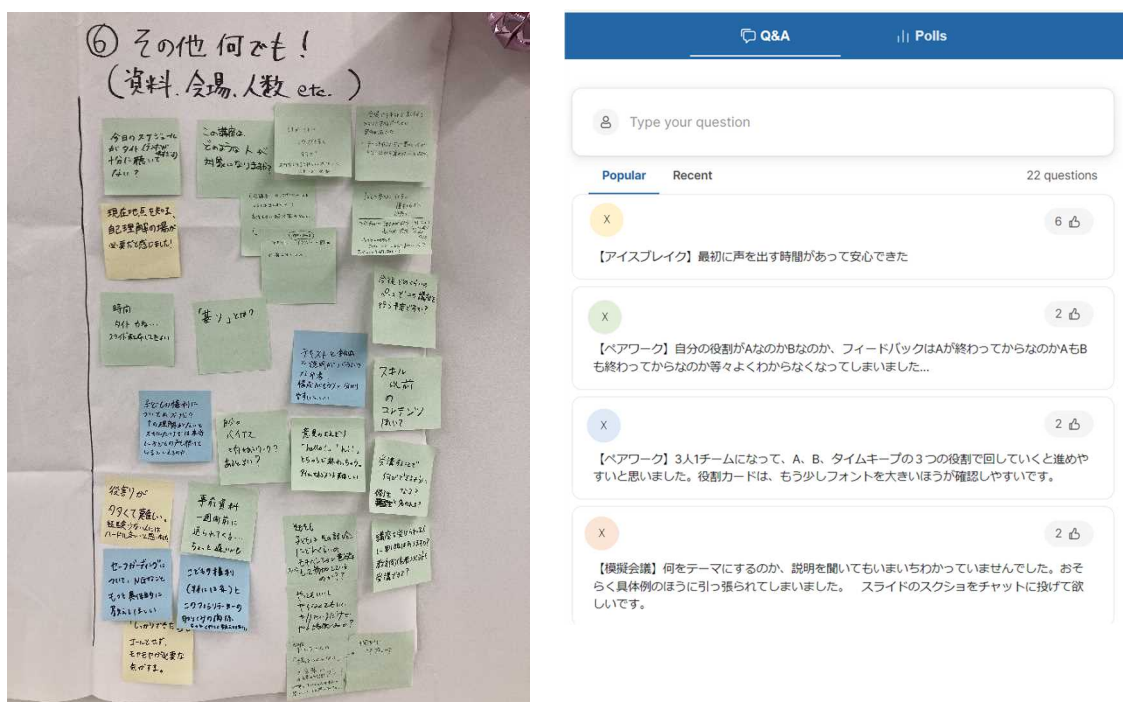
対面講座、オンライン講座ともにモデルプログラム案で想定した 1 日講座 (午前 9 時～午後 5 時) とした。

座学で学習する内容は、テキスト及び動画を事前学習用教材として提供。講座 1 週間前の 12 月 11 日（月）に送付する際に、講座はワークを中心に進めるため、事前に教材を用いて学習してから参加するよう案内した。また、事前課題は下記の 2 点とした。

- 第 3 章 3 節「質問力」の中にある「なやみんご君への質問」を考えてきてください。
- 第 6 章の振り返りを記入ください。講座冒頭の振り返りで、記載いただいた内容を用いてワークを行います。

講座の検証は、講座後に検証目的の意見交換会を 1 時間設ける（午後 5 時～6 時）とともに、参加者アンケート（Web アンケート）により行った。また、受講中は参加者として参加するよう案内したが、受講中に研修のあり方について気づきがあれば適宜アウトプットできるよう、対面の場合は模造紙、オンラインの場合は Slido の QA 機能を用意した。

図表 5-2 受講中の気づきの収集方法（左：付箋、右：Slido）

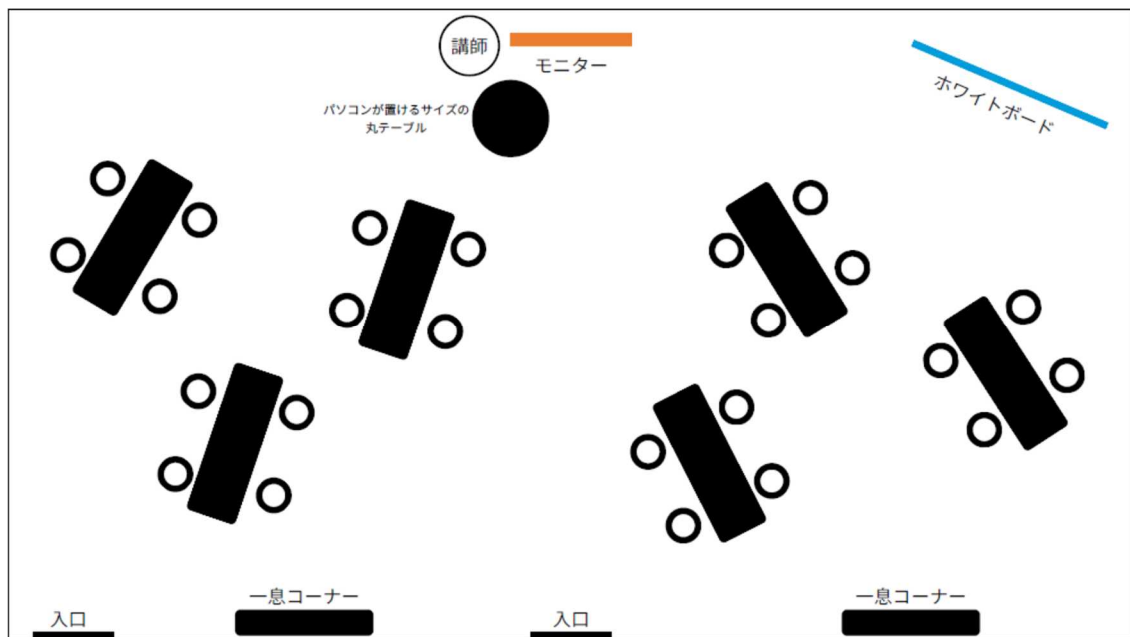


(4) 実施体制

講座はメイン講師 1 名、サブ講師 2 名体制で実施し、両名はモデルプログラムを共同で作成した認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンが務めた。グループワークについて、各グループにファシリテーター役を用意することも検討したが、今後全国で講座実施するにあたり、人材募集や予算面で体制整備が課題となる可能性があることから、主催者側でファシリテーター役を用意することはせず、グループワークはメイン講師・サブ講師が見回る形式とした。

その他事務局として 4 名、メイン講師・サブ講師のバックアップ・検証の役割で 2 名を配置して講座を試行した。

図表 5-3 講座会場レイアウト (対面)



図表 5-4 講座の様子 (アイスブレイク、ペアワーク、オンライン講座)



3. 実施結果

(1) 参加者意見：講座後の振り返り

多岐にわたる項目については、主にアンケートを通じてフィードバックをもらうことを想定し、意見交換会では下記の3点に絞って意見を聴いた。模擬会議のグループごとに事務局メンバーがついて進化した。

- 今までのファシリテーション/こども・若者との関わり方と、今回学んだこども意見ファシリテーターをすべての新しい気づき
- ファシリテーション機会があれば参加したいか、不安はあるか
- こども・若者と大人が対等なパートナーであることへの理解ができたか、アンコンシャスバイアスがあることに気づけたか

1) 新たな気づき

経験者からは、既知の内容であっても系統立てて学んだことで自覚的になれた、組織の中で人材育成に役立てられるという意見があった。未経験者はファシリテーションの難しさを感じたという意見が出された。こども・若者に対するファシリテーションである点を研修する時間を増やしたほうがよいという意見があった。

分類	主な意見
経験者視点での気づき	<ul style="list-style-type: none"> • これまでファシリテーションをしてきた経験について、言語化できていなかったことが言語化され、系統立てて理解することができた • 無意識にしていたことがスキルであることを知り、自分なりの方法に意味があることに気づけた • アイコンタクトやあいづちは知っているが、実践はしたことがなかった。知っていたことを実践しフィードバックをもらえたことが良かった • 若い人を育成するときに、今回系統立てて知れたことで、ポイントを把握でき、伝えやすくなった • 意見を言えるこども・若者、言えないこども・若者がいる中で、場を無理に作らないこともあるという気づきがあった • 本音を言わない人・言いたくない人・言うことがない人等がいて、言わないという選択を自らしている人がいることに気づけた。言わない人に対する着眼点が変わった
未経験者視点での気づき	<ul style="list-style-type: none"> • 初めてのファシリテーションは、想像以上に同時並行で考えながらやらなくてはならないことに気づいた • こども・若者の言葉をそのまま聴くのではなくて、深掘りしていくことが大事だと感じた
提案	<ul style="list-style-type: none"> • こどもならではの要素がもう少しあったほうがいい • 現状のテキストは大人向けの内容とのあまり違いを感じられない

	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーションの DO 部分にフォーカスしているが、企画や振り返る部分が抜けている • それぞれの実践の経験をもとに、実践の場で何に困っているのか、経験者だからこそ話したい・話せる時間があるとよい • 限られた時間の中で、どう効率よく子どもたちの話を聴くのか知りたい
--	---

2) ファシリテーション機会への意欲

模擬会議は実際の子ども相手ではなく受講した大人相手だったため、多くの受講者から子ども・若者に対するファシリテーション機会への参加意欲が示された。しかし、ファシリテーションについての未経験者を中心に、講座の内容が多く、消化しきれないという不安が挙げられた。特に、模擬会議については、ファシリテーター役、参加者役（役割設定あり）、観察してフィードバックする役という複数の役割が課された点が、難易度をあげたことがうかがえた。子ども意見ファシリテーターとは何かについて共通認識を作ることや、受講後にフィードバックをもらう機会について提案があった。

分類	主な意見
意欲的	<ul style="list-style-type: none"> • 講座で実践の場が多かったのは良かった。実践の場を多くほしい。子ども相手にやってみて、それに対してフィードバックをもらいたい • 講座では誰に話を振っても意見を言ってくれる安心感があった。実践はそうは行かないので早く試してみたい
不安	<ul style="list-style-type: none"> • 模擬会議のテーマや役割が入ると、初心者には難しい。役割が複雑だった • 詰め込みがすすぎすぎて、頭に入ってこない。ヨコ文字が多く、頭に入ってこない（キャリブレーション等） • 意外と高度な内容でスピーディーだった。ファシリテーションを実践している人が多かったので良かったが、1年目だったら分からない内容 • 子ども家庭庁のファシリテーターとは何か、最後まで分からないままであった • チェックリストで100点満点を取ることに固執する人も出てきそう • 未経験者が子ども意見ファシリテーターになれるかは不安。子どもの権利侵害が起こらないか不安。被虐待の子どもがいても、会議を進めてしまいかねない。 • チャンスフィードバック¹⁹は、指摘されること。言葉に気をつけて言っても受け取った側の気持ちは人それぞれだろう • 講座後に相談できる場や相手がほしい

¹⁹ 試行的講座では、ファシリテーター役に対して改善の余地があると思ったスキル要素についてチェックシートの「チャンス」欄に記入してフィードバックをするようにした。

提案	<ul style="list-style-type: none"> • 「こども意見ファシリテーター」のイメージが参加者によって違っていたように感じた。経験者・未経験者でイメージを擦り合わせる事が大事かもしれない • 参加者はファシリテーターがいる状況で会議をしたことがある人ばかりではない。ファシリテーターがいる会議を一回設定して、共通認識を作っても良かったのではないか • なやみんご君の事例の意図が分からない。何のためにワークをしているのか、どのような場合に必要なスキルなのかを明確にしてほしい。 • プログラムの中で実際に見学する内容があるとよいかもしいない • ファシリテーターをやりたい人でも実践経験を積むことが必要。「仮免」として先輩の一部をサポートするような関わり方から始めることがよさそう • 必ず誰かにフィードバックしてもらうようにしたらよい • 経験者ファシリテーターが集まったときに、持ち味のぶつかり合いになる可能性がある。ファシリテーターの持ち味を許容するのか、ファシリテーターを募集する側が整理する必要がある
----	--

3) 対等なパートナーの理解、アンコンシャスバイアスの気づき

自分のバイアスに気づけたという意見はあったが、気づくための説明やワークが不足しているという意見が多かった。特に、こども・若者の最善の利益のために意見を聴くというマインドセットや基本姿勢を持つことに、より重点を置くべきだと言う意見が多く聞かれた。

分類	主な意見
気づけた	<ul style="list-style-type: none"> • 日ごろ小学生と関わる事が多いため、意図を解釈するのが早すぎる傾向があること、まとめようとし過ぎることに気づいた
気づけなかった	<ul style="list-style-type: none"> • 自分自身のアンコンシャスバイアスに気づくワークがあんまりなかった（最初に、基本姿勢やセーフガーディング等、あるべき姿を説明してしまっているで気づきにくい） • アンコンシャスバイアスについての説明がもっとほしかった • こどもと大人が対等なパートナーであることを理解するためには、こどもの権利等についてもっと深く学ぶ必要がある
提案	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーションをするのは大人、意見を聞かれるのはこどもという構造になっている。大人の意見をこどもが聞く等、こどもと大人の参加者が話すことで対等であることを浸透させられるのではないか • 何のためにやるのかを徹底する必要がある。「こどもの最善の利益のため」という説明も少ない。「こども家庭庁が言っているからやる」という人ばかりにならないか。マインドセットがないため腹落ち感が不足している

	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシリテーターが学んだとおりにトップダウンでファシリテーションを押しつけることになっては本末転倒。基本姿勢やこどもの権利を講座でもっとやるべき ・バイアスを取り除く作業に時間をさけるとよい（自分に問いかける時間がほしい）
--	---

(2) 参加者意見：アンケート

1) 実施方法

振り返り時間終了後に、対面では QR コード、オンラインでは URL を共有してアンケートを実施した。対象者 38 名中 30 名が回答した（回収率 78.9%）。

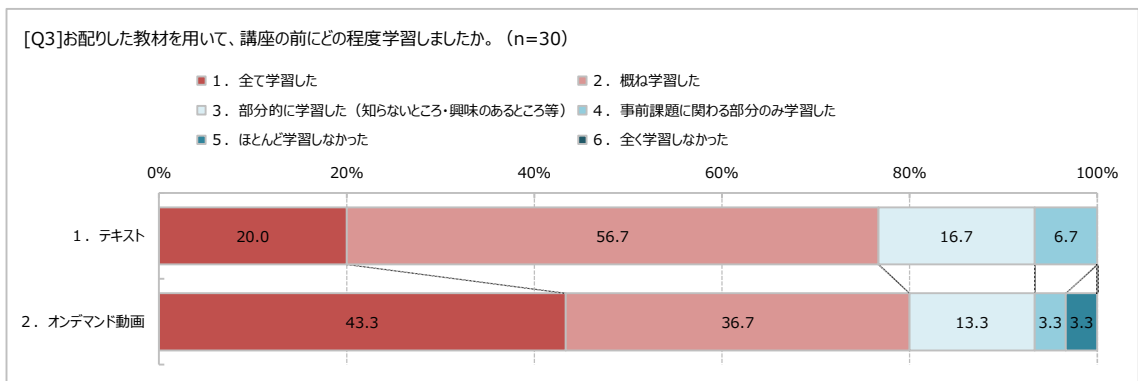
2) 集計結果

参加者アンケート結果は、事前学習、当日の講座、講座全体の 3 分野に分けてまとめる。

● 事前学習

図表 5-5 に示す通り、教材を用いて講座受講前に自主学習をしたかどうかについて、テキストを全てまたは概ね学習した人は参加者のうち 76.7%、オンデマンド動画を全てまたは概ね学習した人は参加者のうち 80.0%であった。

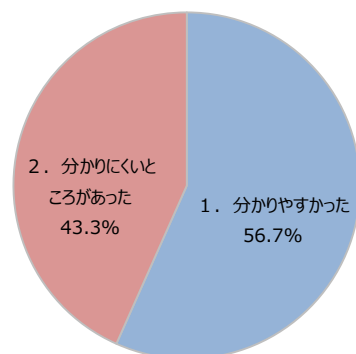
図表 5-5 事前学習の実施状況 (SA)



図表 5-6 の通り、テキストとオンデマンド動画は、56.7%が分かりやすかった、43.3%が分かりにくかったと回答した。分かりにくかった点は、「カタカナ語や専門用語が多い」、「動画がテキストのどの部分にリンクしているのかが分からない」、「当日資料との関連が分かりづらい」等の意見があった。

図表 5-6 テキスト、オンデマンド動画の分かりやすさ (SA)

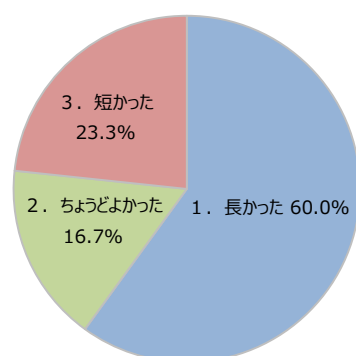
[Q4]使用したもの（テキスト、オンデマンド動画）は分かりやすかったですか。
分かりにくいところがあった場合は改善点を教えてください。
(n=30)



事前学習の所要時間は、60.0%が長かったと回答した。

図表 5-7 事前学習の所要時間について (SA)

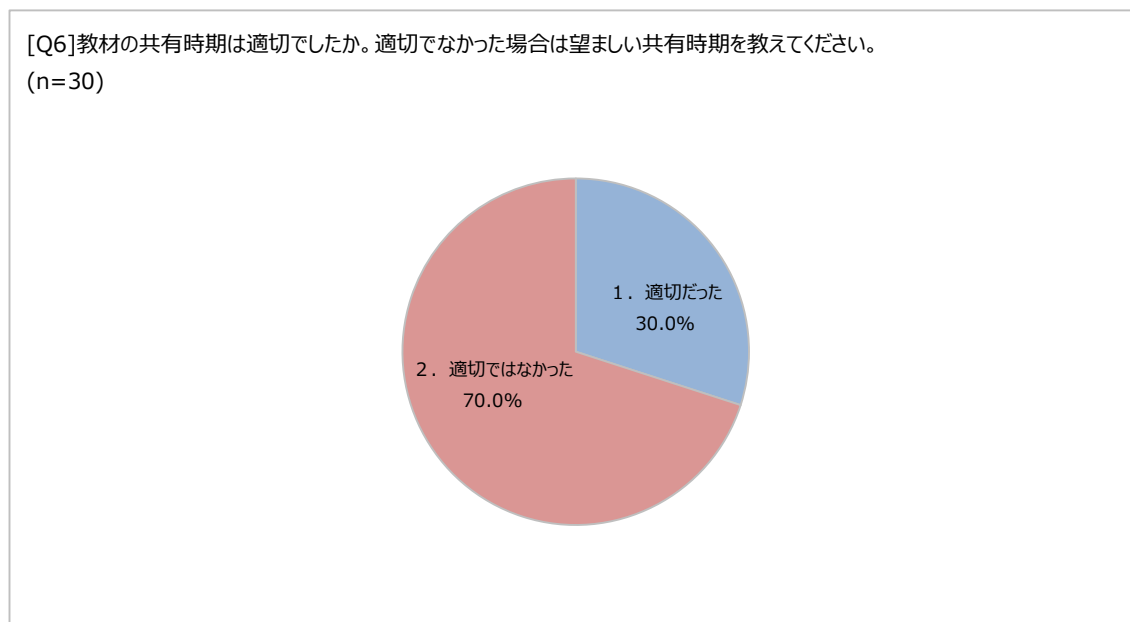
[Q5]事前学習の所要時間は適切でしたか。
(n=30)



試行的事業では、教材を講座の 1 週間前に受講者に共有した。この共有時期について、70.0%の参加者が適切ではなかったと回答している。理由は、「事前課題があることは申込時に知らせてほしかった」、「事前学習期間の 1 週間の間に感染症に罹患したため準備不足の状態を受講することになってしまった」、「仕事が立て込んでいる時期であったため時間が足りなかった」等の意

見があった。望ましい教材の共有時期は、講座の2週間前～1か月前がよいという意見が多かった。

図表 5-8 教材の共有時期について (SA)



事前学習の内容は、「オンラインの操作についてもどの程度までできるようにしておくべきかを記載してほしかった」という意見があった。また、「当日の予定表を事前に共有してもらえたほうが、事前学習のポイントをおさえやすい」という意見が多かった。

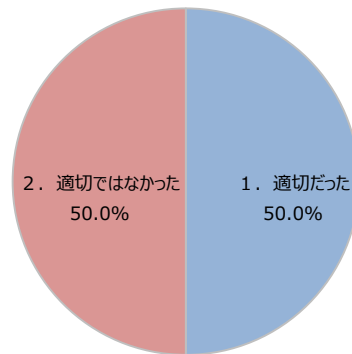
● 講座

講義・ワークの実施方法について、図表 5-9 の通り、50.0%が適切であったと回答した。改善点は、「初学者向けには講義部分がより丁寧なほうがよい」、「テキストのどの部分を扱っているかの案内があるとよい」、「大人向けではなく子ども向けファシリテーション特有のポイントについて丁寧に扱ってほしい」といった意見があった。

講座の日程については、「内容が多いため2日間に分ける等、時間に余裕をもったほうがよい」という意見が複数あった。

図表 5-9 講義・ワークの方法について (SA)

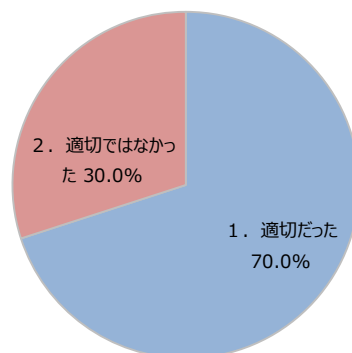
[Q9]講義（ファシリテーションとは）・ワーク（コミュニケーションスキル）の方法（時間配分、ワークの方法等）は、こども意見ファシリテーターとして活動するための学習方法として適切でしたか。
(n=30)



講義・ワークの実施内容について、図表 5-10の通り、70.0%が適切であったと回答した。改善点としては、「講座で扱うバイタルサインのことをファシリテーションのスキルだと誤解されないようにする必要がある」、「今回の内容を学んだだけでファシリテーターとして場を設定しようとすると危険である」、「こどもの意見を引き出すためのマインドセットを重点的に扱ったほうがよい」等の意見があった。

図表 5-10 講義・ワークの内容について (SA)

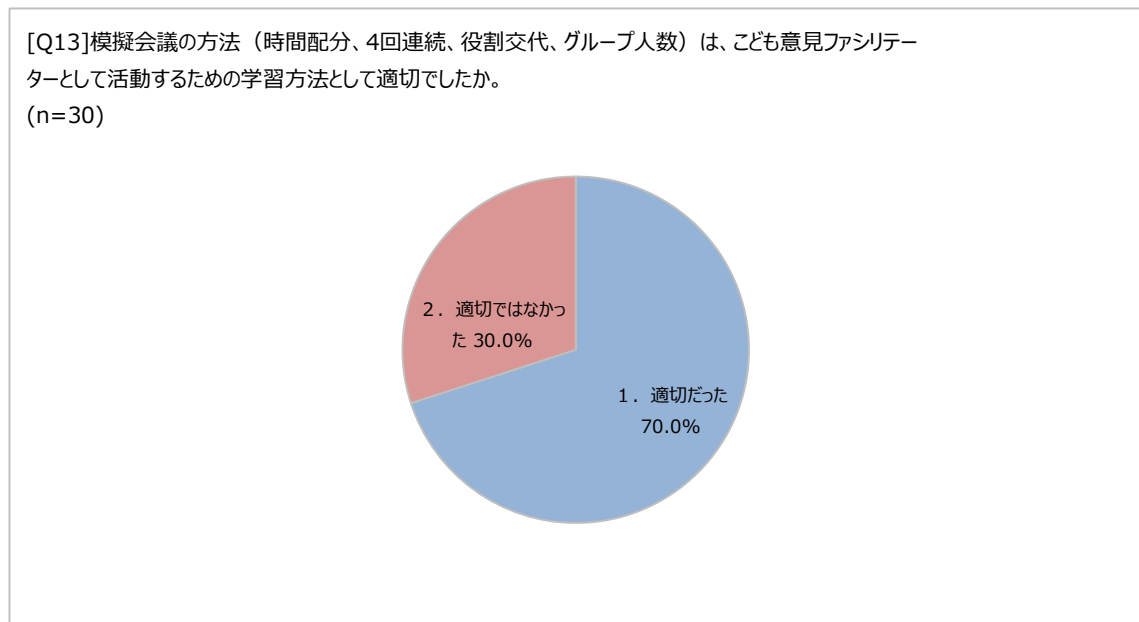
[Q11]講義（ファシリテーションとは）・ワーク（コミュニケーションスキル）の内容は、こども意見ファシリテーターとして活動するための学習方法として適切でしたか。
(n=30)



模擬会議の方法について、図表 5-11 の通り、70.0%が適切であったと回答した。改善点とし

ては、「前半のファシリテーターが意見の発散、後半のファシリテーターが意見の収束を扱うという進め方は難しく、扱う範囲の認識に個人差がある。一人で発散と収束を体験できるとよい」、「フィードバックの時間があまりなかったため、振り返りが十分に行えなかった」等の意見があった。また、「個人情報の取扱い」、「教育現場でのこどもの既習内容とそれに合わせたファシリテーション」、「メモの取り方」等が講座で不足していた内容として意見があった。

図表 5-11 模擬会議の方法について (SA)



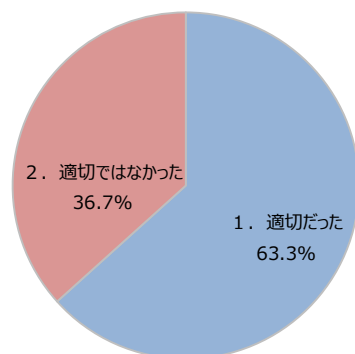
模擬会議の内容について、図表 5-12 の通り、63.3%が適切であったと回答した。

改善点として、テーマについては、「ワークで学習したスキルを活用することで精いっぱいであるため、扱うテーマはより具体的で扱いやすいもののほうがよい」、「実際にこどもから意見を聴取する場面で扱うようなテーマがよい」、「スキルの実践に集中するためにテーマや与えられる設定をシンプルにしたほうがよい」等の意見があった。また、役割について、「観察者を別で設置したほうが、こども役が役割に徹することができ、観察者の視点からの適切なフィードバックが得られる」という意見もあった。

図表 5-12 模擬会議の内容について (SA)

[Q15]模擬会議の内容(テーマ・シチュエーション)は、こども意見ファシリテーターとして活動するための学習方法として適切でしたか。

(n=30)

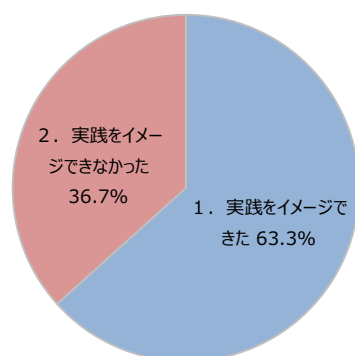


模擬会議で実践をイメージできたかについては、図表 5-13 の通り、63.3%が「実践をイメージできた」と回答した。その理由としては、「模擬会議の時間が短かった」、「こども役が大人であったため反応が不自然であった」、「発散と収束を通して体験できなかった」等が挙げられた。「模擬会議を経てすぐに実践するとなってもできる気がしない」という意見もあった。

図表 5-13 模擬会議での実践イメージ (SA)

[Q17]模擬会議でファシリテーター役を担当した際、実践をイメージして行うことができましたか。

(n=30)

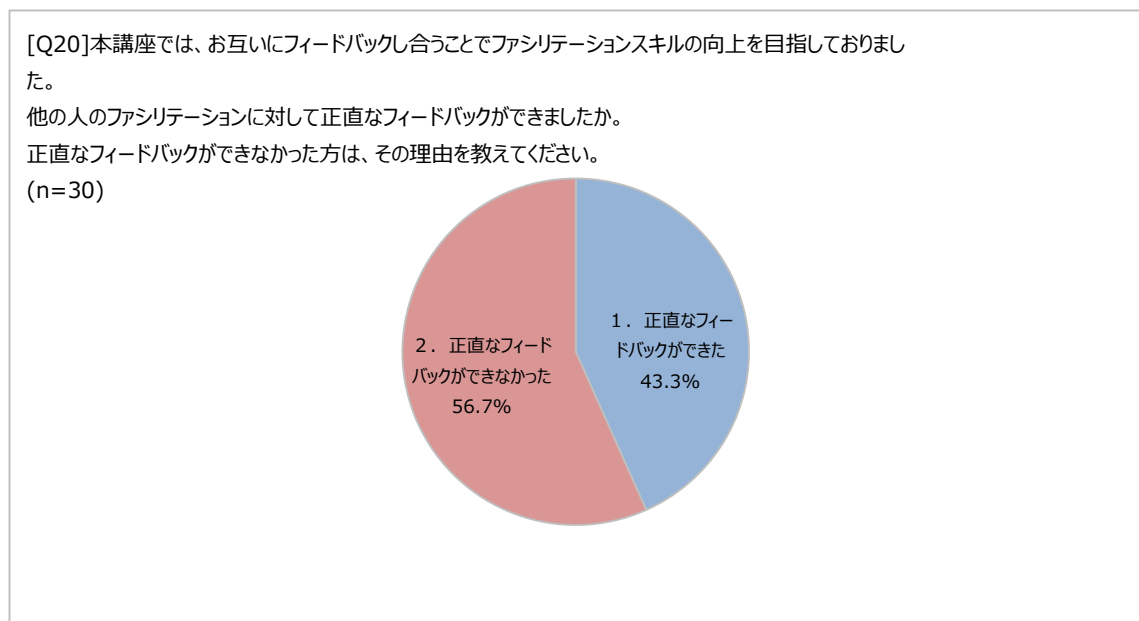


模擬会議で正直なフィードバックができたかどうかについては、図表 5-14 の通り、56.7%が「正

直なフィードバックができなかった」と回答した。その理由としては、「初対面の人とは関係性ができておらず、相手の背景も分からないため正直にフィードバックすることは難しい」、「相手が年上であると改善点は言いづらい」等の意見があった。

正直なフィードバックをするために必要と考えられることは、「『フィードバックはよい面と悪い面を一つずつ伝えてください』というような案内があると使いやすい」、「安心できる場をお互いに作ろうとしていることが感じられるような講座へのチェックインの時間」等が挙げられた。

図表 5-14 模擬会議でのフィードバック (SA)



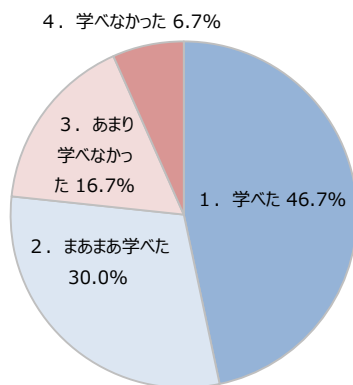
- 講座の全体評価

講座全体で学びたかったことを学べたかについては、図表 5-15 の通り、76.7%が「学べた」または「まあまあ学べた」と回答している。「あまり学べなかった」または「学べなかった」と回答した参加者からは、「こどもの権利条約やこども意見ファシリテーターの必要性等の前提にあまり触れられていない」、「こども相手のファシリテーション特有の内容が学べなかった」、「実践の場についての情報提供がない」、「ファシリテーションのスキルではなく、そのスキルがこどもにどのような影響を与えるのかということもからの視点を学びたかった」等の意見があった。

また、「失敗できる場としてのスキルアップ研修がほしい」という声もあった。

図表 5-15 講座全体の有用性 (SA)

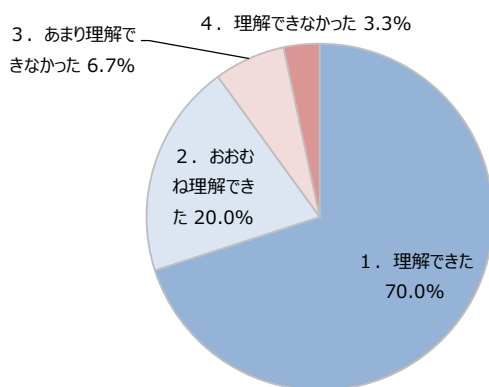
[Q23]本講座全体（事前学習、当日の講座を含む）では、知りたかったことを学べましたか。
(n=30)



こども意見ファシリテーターがこども・若者の意見表明のサポーター役であることについては、図表 5-16 の通り、90.0%が「理解できた」または「おおむね理解できた」と回答した。

図表 5-16 こども意見ファシリテーターの役割の理解 (SA)

[Q26]こども意見ファシリテーターは、こどもの意見表明のサポート役であることを理解できましたか。
(n=30)

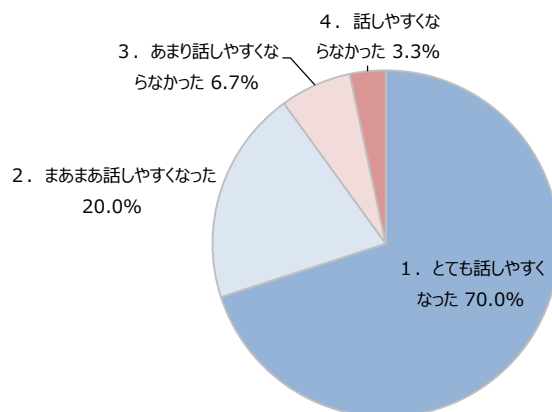


会場の環境づくりや講師の進め方の効果については、図表 5-17 の通り、90.0%が「とても話しやすくなった」または「まあまあ話しやすくなった」と回答した。

図表 5-17 会場の環境づくりや講師の進め方の効果 (SA)

[Q28]会場の環境（装飾やレイアウト、茶菓子の提供等）や講師の進め方などにより、話しやすくなりましたか。

(n=30)

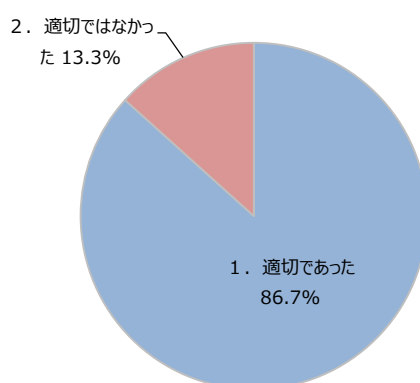


講座の実施場所や方法については、図表 5-18 の通り、86.7%が「適切であった」と回答した。適切でなかった理由としては、オンラインのツール操作方法のレクチャーや、対面実施の際の会場地図の提供の必要性が挙げられた。

図表 5-18 講座の実施場所や方法について (SA)

[Q29]講座の実施場所や方法（交通アクセス含む）は適切でしたか。適切でないと感じた場合、その理由を教えてください。

(n=30)



3) その他試行的事業への自由意見

- 事前学習

全体として、動画での学習は分かりやすくファシリテーションのイメージができるため、効果的であるという意見が多く見られた。更にわかりやすくするためには、「受講する人それぞれの前提知識に応じて特に学んでおいたほうがよい箇所の案内等があると、限られた時間でも効率的に事前学習に取り組むことができる」、「動画がテキストのどの部分に対応しているのかを示してもらえると更に分かりやすい」等の意見があった。

また、「スマートフォンのみでは学習できず、印刷するよう指示があるのは不便である」という意見も見られた。

- **事前学習と当日の講座の棲み分け**

事前学習でインプットをした上で講座に参加する建付けは有効であったという意見が多くあった。しかし、一部では「初学者にとっては事前学習の内容が難しい」、「事前学習の量が多いためあまり自習してくることに期待できない」等の意見も見られた。

- **講師経験者が講座を実施できそうか**

講師役を担う際に本講座をどのようにアレンジするかについては、下記のような意見が挙げられた。

- 時間に余裕を持てるよう、講座を基礎編と実践編に分けてコミュニケーションスキルに半日、模擬会議に1日あてる等の構成にする
- 模擬会議では一人が会議全体をファシリテートする形にする
- 一部のワークについてはファシリテーター役、こども役、フィードバック役を設けてワークに集中できるようにする
- 傾聴力や質問力として紹介されている複数の要素を1回のワークでまとめて行えるようにする
- ワーク以外で項目ごとの理解度チェックを簡単に行う
- こども・若者の意見を集めることの意義や意図をファシリテーターに意識させることや、マインドセットに重点を置く
- 多人数の中での話しの聴き方や、多人数への問いかけ、発散・収束のための具体的な問いかけの要素を含む
- ①こどもの権利と意見表明権、②こども・若者に関わる大人としての自己理解・傾聴ワークでバイアスを実感、③こども・若者が意見表明できず傷ついてしまう場面を考える、④ファシリテーション体験ワーク（アイスブレイク、傾聴、質問）、⑤ファシリテーションを観察しあう、⑥振り返り、という構成にする
- 受講した人が楽しくなるような仕掛けをつくる

- **こども役を担当して感じたこと**

アンケートでは、参加者がこども役を担当したときに感じた、こどもが本音を言いやすくなる、または言いにくくなると思われる言葉がけについて聞いた。参加者の意見から、意識すべきと考えられる点を一部抜粋する。

- 「言いつらいことは無理に言わなくてもいいよ」という声かけをする
- 「そうなんだ」、「なるほどね」と受け止める
- 「気づいたら教えてね」と、待っていることを示す
- こども・若者の名前を呼ぶ
- 沈黙の時間も大事にする
- まずこどもの発した言葉を拾って、「どんなところが○○だったの？」「その時どんな気持ちになった？」「それってこんなこと？」と丁寧に聴く
- 「なんで？」、「なにが？」、「どうしたいの？」等の聞き方は厳しい印象を与えるため、「なぜそう思ったの？」等に言い換える
- 「でも」、「だって」等の否定的な言葉や、「～じゃん」という断定的な言葉は使わない
- 「自由に意見を出してみよう」という言い方は発言しにくいいため使わない
- ファシリテーターが場を回すのに必死な雰囲気を出さない
- ため息をつかない
- 声色を意識的に高くする

- **全体を通して**

その他の意見としては次のようなものが挙げられた。

- 本トレーニングの終了段階では、あなたたちはまだ一人前ではありませんよということをしっかりと伝えるようにするとよい
- 講座と実践をセットにして募集をするとよい
- 階層（経験や社会的な立場）や地域によって、多様な講座設定（講義とワークの日をちを分ける等）、オールオンデマンド講義、動画配信等の選択肢があるとよい
- 一般市民向けにこどもの意見聴取についての講演を実施し、こども意見ファシリテーターへの関心を持ってもらえるよう啓蒙する
- 将来的には「こども意見ファシリテーター」の活動に参加したこども達が次のファシリテーターとなって活動できるような環境が整備されるとよい
- 夏休みの教員たちの研修・講座期間に組み込んだり、学校関係の会計年度職員向けの研修・講座を開催したりできるとよい
- 最初は大学生から、徐々に高校生、中学生をファシリテーターとして取り入れていくとよい
- 今回程度の学習時間やカリキュラムであれば、受講者には終了を証明するようなものの交付は控えるべきである。体系的に学習できるものになるのなら、修了証の交付があってもよいと考える。修了証があれば、その獲得のために学ぶ人の意識も高くなると想定される
- 児童健全育成推進財団や各県の児童館連絡協議会等の研修に取り入れられるとよい

第6章. 試行を踏まえた見直し結果

試行的事業の参加者意見を踏まえ、養成方針について検討すべき論点を整理し、対応を検討した。

1. 前提

講師スライドや教材で説明していたつもりであったが、受講者のフィードバックを踏まえると改めてファシリテーターの活動場面が、初対面のこども・若者に対して、政策について意見を聴くグループファシリテーションであることの共通認識の醸成が必要と認識した。多くの受講者が業務上、日常的にこども・若者と接しており、そのコミュニケーションに活かせるという評価があったものの、当該場面はファシリテーションの想定場面というよりは、講座で学んだことを活かせる場面の一つとして整理することとした。

2. 論点と対応方針

論点① ミニмумライン

「受講してもこども意見ファシリテーターとは何かが分からなかった」、「アドボケイトと何が違うのか」、「ファシリテーションスキルは学べたものの、こども・若者の安全を守ることやこどもの人権について学ぶ必要がある」という趣旨の意見を踏まえると、改めて「こども意見ファシリテーター」の定義と、それを踏まえた講座後に最低限身につけてほしいことを整理する必要がある。具体的には、下記の通り整理し、モデルプログラムに反映した。

- こども：こども・若者に害を与えないという最低限を守ることができる
- 意見：こども・若者が安心して政策等について意見を言えるようサポートするという、こども意見ファシリテーターの人物像を自分なりに言語化できる
- ファシリテーター：ファシリテーションスキルを理解し、基本的なやり方についてひととおり学んでいる

論点② こども・若者相手であることの明確化

論点①と同様に、試行的事業の講座内容では、こども・若者に対するファシリテーションであることを共通認識とすることや、そのための対応を学ぶことが相対的に少なかった。ミニмумラインの観点からも、こどもの権利、こどものセーフガーディングについてテキストを追加すること、講座内で共通認識を持つためのワークを実施すること、アンコンシャスバイアスに気づくためのワークも実施することとし、モデルプログラムと教材に反映した。

論点③ 受講者のパターン分けとターゲット層

受講者から多様な意見が寄せられたが、主にこども・若者と関わる経験の有無、ファシリテーション経験の有無により、期待値や評価が分かれた。

そこで、2つの軸で受講者のパターンを分けた。主な受講者ターゲットを B：こども経験有・ファシリ経験なし（少ない）と D：こども・ファシリ経験なし（少ない）と想定して、必要なスキルの学習とベージ

クな模擬会議の演習を中心とする内容を「基礎編」、基礎編受講者やすでに一定のスキルのある方（図表 6-1 の C）のフォローアップとしてこども・若者を対象とするうえで、必要な知識と応用的模擬会議を中心とする内容を「応用編」とするプログラムの見直しを行った。（あくまで講座の狙いを分かりやすく単純化したものであり、本分類が全体的基準ではない）

図表 6-1 養成講座のターゲット層のイメージ²⁰

	ファシリ経験** (多い)	ファシリ経験 (なし、少ない)
こども経験* 業務・活動を通じて、日常的にこども・若者と接している経験がある	A: こども向けのファシリテーションの実践経験が豊富 (該当例) ✓ NPOや大学研究室等、こども若者の権利やこども若者参画でファシリテーション実践団体 ✓ 当該団体の登録ファシリテーター →本プログラムによる養成対象外	B: こども経験はあるが、ファシリの経験がない (少ない) (該当例) ✓ こども・若者向け活動団体 ✓ 学童・児童館・養護施設等の職員 ✓ こどもの権利の専門家・アドボケイト など
こども経験 (なし、少ない)	C: 「こども向け」ではない、一般ファシリテーションの経験がある (該当例) ✓ 一般ファシリテーション団体及び登録ファシリテーター ✓ 基礎編受講後に実践を経験した人 など	D: こども・ファシリ経験のいずれもない (少ない) (該当例) ✓ 地域での活動者やボランティア ✓ 自治体の事務系職員 ✓ 大学生 など

* こども経験…こども・若者の意見を業務として行っている、または経験豊富
**ファシリ経験…グループファシリテーションの経験があり、そのためのスキルがある

論点④ 対面・オンライン別のプログラム

オンラインは、オンラインツールの操作の理解やネット接続トラブル対応、アイスブレイクに時間をかける必要があったことから、対面プログラムよりも時間に余裕を持たせたプログラム・タイムラインとすることを検討した。しかし、モデルプログラムとしては統一的な時間のほうが望ましいと考え、オンラインツールの操作の理解は、事前に対応する方法をモデルプログラムに記載することや、ネット接続トラブル対応は講師補助役が担うことで、講座全体のタイムラインは同じとすることとした。

論点⑤ 模擬会議や振り返りの進め方

模擬会議において、ファシリテーター役に対してフィードバックが難しかったという意見が多数あった。その理由の一つは、ファシリテーションスキルを学びつつ、こどもの役割を果たしながら観察者としてフィードバックコメントを考えることが難しい点が挙げられた。

そこで、観察者（フィードバックする人）を別に立てる、関係性が築けていない中でチャンスフィードバックは難しいため、よかった点の気づきを伝えるだけでもよしとする、講座の最後の振り返りの時間に、模擬会議でグループメンバーからもらったフィードバックを使って自らの振り返りを行うこととし、モデルプログラムに反映した。

²⁰ * こども経験…こども・若者と日常的に接したり対話する機会がある、またはそうした経験が豊富 **ファシリ経験…グループファシリテーションの経験があり、そのためのスキルがある

論点⑥ 事前学習教材

事前学習において、使用するテキストと動画が連動していない箇所がある指摘を多数受けた。テキストの見出しと動画のタイトルやセクション名を一致させて、お互いを参照しやすくした。

論点⑦ 質問力のワーク

個別対応を行うケースが想起されるワークであった点が、グループファシリテーションとケースワークの混乱を招いたため、「公園がどうなったらよいか」等のこども施策のテーマになりやすい内容で質問力のワークを作成することとし、教材に反映した。

論点⑧ カタカナ語を減らす（誰にでも伝わるレベルの「お茶の間言葉」にする）

講座が難しかった理由の一つとして挙げられたのが、カタカナ語が多かったことである。ファシリテーション経験がない受講者にとって、日本語として馴染のないカタカナ語が頻出したことが、直観的に理解できない状況を生じている側面があった。そこで、下記の用語については平易な日本語をつかい、ファシリテーション用語は（ ）で併記することとし、モデルプログラムと教材に反映した。

- キャリブレーション、チャンクダウン、ミラーリング、マッチング、バックトラッキング、オープン/クローズドクエスチョン、アンコンシャスバイアス、グランドルール 等
- 例外：ファシリテーション、セーフガーディング（適切な日本語がないため）

試行を踏まえた主な変更点は図表 6-2 の通りである。

図表 6-2 試行的事業による主な変更点

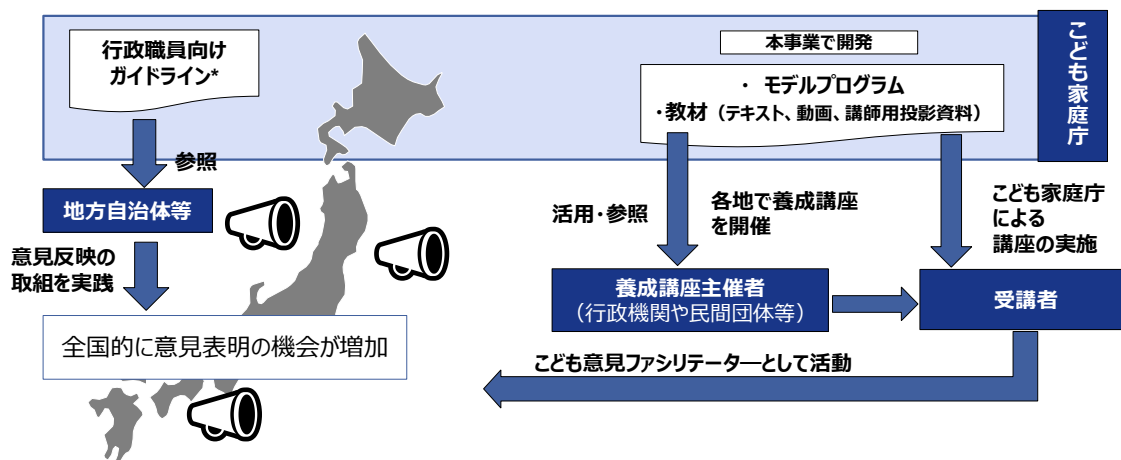
項目	試行時	試行後
講座の重点	<ul style="list-style-type: none">• 講座ではファシリテーションスキルを重視	<ul style="list-style-type: none">• ミニマムライン（講座はこども・若者に害を与えないこと、こども意見ファシリテーターの人物像を言語化できる、ファシリテータースキルの理解）を定める• 講座の内容を基礎編と応用編に分け、ミニマムラインを基礎編とする
講座	<ul style="list-style-type: none">• 経験者、未経験者共通の講座	<ul style="list-style-type: none">• 講座（基礎編）のターゲット層として、ファシリテーション経験が少ない方を想定する• 講座（応用編）は、主におとな向けのファシリテーション経験者、基礎編を受講後、実践を経てもう少し研修を重ねたいと思う人、ある程度経験はあるが実践の場面が限られている人（元教員等）等を想定する

項目	試行時	試行後
		<ul style="list-style-type: none"> • 応用編は半日で完了し、こども・若者を対象とするうえで必要な知識と応用的模擬会議を中心とする。基礎編受講者等、すでに一定のスキルのある方の任意のフォローアップとして位置づける。カリキュラムとして提案するが、こども意見ファシリテーターとして活動するための要件とはせず、ニーズに応じて開講するオプションとしてモデルプログラムで提示する
模擬会議	<ul style="list-style-type: none"> • 4人で4回、ファシリテーター1名・参加者3名（役割カード） 	<ul style="list-style-type: none"> • 4～5人で2回、ファシリテーター1名、参加者3～4名、観察者1名
ワーク	<ul style="list-style-type: none"> • 質問力の「なやみんご君」のワークを行う 	<ul style="list-style-type: none"> • グループファシリテーションの実践の場で想定されるテーマに近い「誰もが安心できる街づくり」についてワークを行う
用語	<ul style="list-style-type: none"> • ファシリテーション用語を使用 	<ul style="list-style-type: none"> • 平易な日本語に（）でファシリテーション用語を併記する

試行的事業の検証結果や下記のこども意見ファシリテーター養成におけるこども家庭庁の関わり方、役割を踏まえて、モデルプログラムや教材を最終化した。

- こども意見ファシリテーターは、全国的に国や地方（行政機関、民間団体等）が様々な場面で養成されることを期待して、こども家庭庁はモデルプログラムと教材を開催希望者に提供する。
- 全国で養成されるファシリテーターを登録・管理する等、こども家庭庁による中央管理はしない。
- こども家庭庁以外の主体が養成講座の開催を希望する場合は、企画概要を作成してこども家庭庁に申込をし、講座開催後に報告する。これにより、全国的な養成状況をこども家庭庁が把握できるようにする。
- こども家庭庁は自らの事業において、主催者としてこども意見ファシリテーターを養成し、受講者には「受講証」を発行する。ただし、受講証はこども意見ファシリテーターの養成講座を受講した事実を証するものであり、一定のファシリテーションスキルの習得を証明したり、資格を授与したりするものではない。こども家庭庁以外の主体が養成講座を主催した場合は、主催者が受講証を発行する。
- こども家庭庁主催による講座受講者についてはモデルプログラムで示した通り、希望する受講者に対してファシリテーション機会の提供、ファシリテーター見習いとしてフィードバックを受けながら育成する環境をつくる。

図表 6-3 こども意見ファシリテーター養成におけるこども家庭庁の役割イメージ



本事業で開発した成果物と入手方法は図表 6-4 の通りである。

図表 6-4 成果物と入手方法

成果物	内容	入手方法
モデルプログラム	受講対象、学習目標、カリキュラム、講座のタイムライン、各単元の狙いを養成講座主催者向けにまとめたもの	こども家庭庁ホームページより「こども意見ファシリテーター養成講座開催ガイド」を入手。モデルプログラムのほか、講座の実施要領や講座運営ガイド、プログラム評価を掲載している
教材：テキスト	こども意見ファシリテーターが学ぶべき項目をすべて含んだ事前学習教材	講座開催希望者が企画概要にて申込をした後にこども家庭庁より提供
教材：動画	事前学習の中で、特に重要な点を解説したもの。実際のファシリテーション場面を視覚的に学ぶためのオンデマンド教材	講座開催希望者が企画概要にて申込をした後にこども家庭庁より提供
教材：講師用投影資料	研修を実施する講師が、当日研修において講義する際に活用する投影資料	講座開催希望者が企画概要にて申込をした後にこども家庭庁より提供

第7章. 全国的なこども意見ファシリテーター養成に向けて

こども基本法の施行やこども大綱の策定に伴い、都道府県こども計画、市町村こども計画が策定され、国や都道府県、市町村でこども・若者の意見を聴く場が増えていくことが想定される。一方、令和5年度調査研究によると、こども・若者から意見を聴く取組を行っている地方自治体のうち、5割程度が行政職員自らファシリテーターを務めており、知識・技術を持ったファシリテーター人材を確保することが課題となっており、こども意見ファシリテーターを養成するニーズがある。

本事業により、講座主催者向けに養成講座を実施するためのカリキュラムや、運営方法のモデルを示した「モデルプログラム」、講師に参考として提供できる「講師用スライド」、受講者向けに配布する「テキスト」及びオンデマンドで学習する「動画」を開発したが、今後、全国的にこども意見ファシリテーターが増えるには何が必要か考察を述べる。

1. 受講者を増やす

講座を受講する受講者を確保し、増やす必要がある。想定しているターゲット層は、こども・若者と業務を通じて日常的に接しているものの、ファシリテーション経験が少ない児童館等のこども・若者関連施設の職員や、こども・若者と関わる機会がそれほど多くなく、ファシリテーション経験も少ない自治体職員や大学生等を想定している。しかし、「こども意見ファシリテーター」という存在自体、これから作り上げていく側面が強いため、こども意見ファシリテーターの認知度を向上していく必要があり、それは全国的に展開する観点から、短期的にはこども家庭庁が養成講座を実施することが望ましい。こども意見ファシリテーターとは何か、受講すると何が出来るようになるのか、どのような活躍場面が想定されるのか、動画等を作成し、メディアやターゲット層が所属する組織経由でプロモーションすることが考えられる。

2. ファシリテーターの質の向上

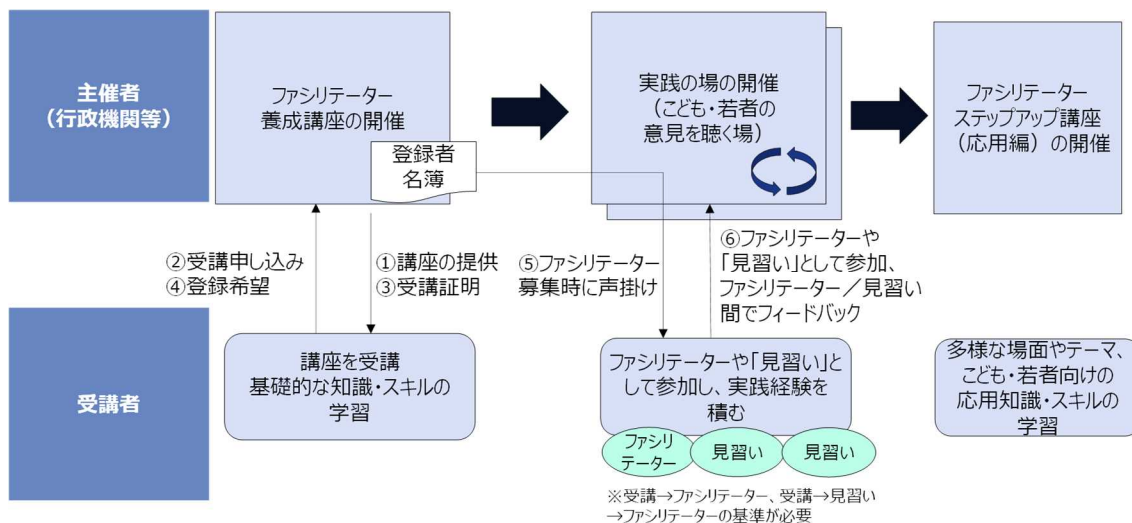
本報告書で述べた通り、事前学習と講座受講のみでこども意見ファシリテーターに到達するのではなく、受講はこども意見ファシリテーターとして活動をスタートするための条件である。受講後にこども・若者と向き合い、ファシリテーションする実践経験を重ね、振り返りや他者からのフィードバックを通じた継続的なスキルの向上や成長が求められる。

具体的には、ファシリテーター養成講座後に実践機会が用意されていること、実践機会の中で「見習い」としてファシリテーターから OJT（On-the-Job Training）で学びフィードバックを受けられること、受講者や見習い同士でコミュニティを形成し、相談やフィードバックし合えることができる環境が必要である。これらの環境は各地域で構築していくことが期待されるが、短期的にはこども家庭庁が開催している「いけんひろば」がモデルケースとなることを期待される。

また、本事業では基礎編のほかオプションとして、経験者のステップアップを想定した応用編をモデルプログラムで示したが、中期的には意見を聴くこども・若者の年齢や背景、特性や場面、議論するテーマ等

に応じて専門的な講座が開発されることも期待される。また、こども・若者自身がファシリテーターになることを想定した、中高生向けの養成講座の開発も考えられる。ファシリテーター養成からステップアップまでのイメージは図表 7-1 の通りである。

図表 7-1 各地域におけるファシリテーター養成と実践のイメージ



3. 主催者を増やす

受講者が増え、受講後の実践やステップアップ講座を経て質が向上することに加えて、講座の主催者を増やしていくことも必要である。

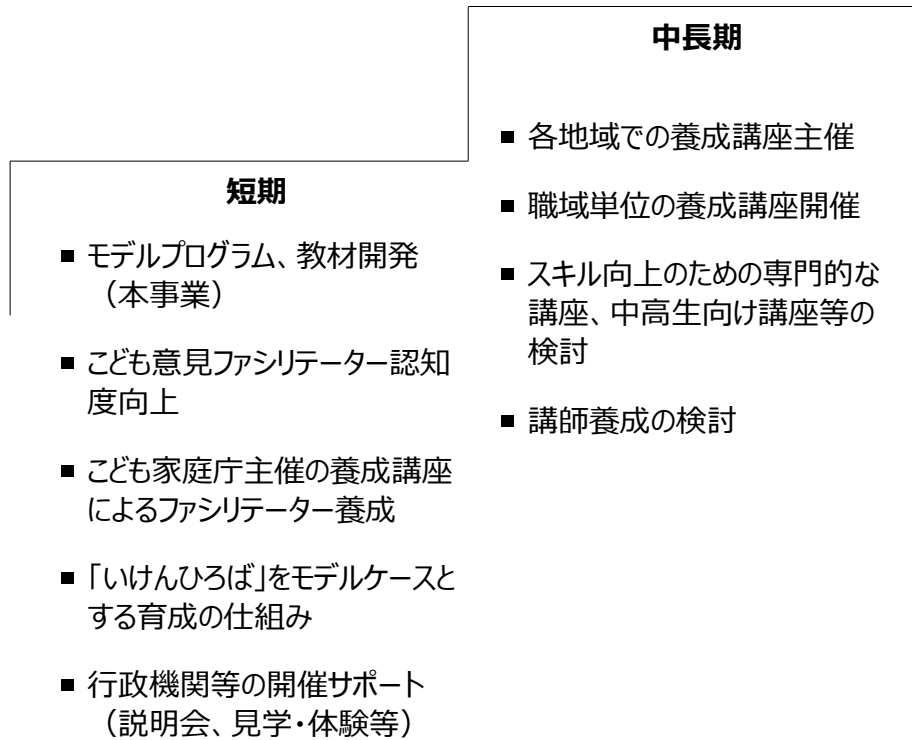
主な講座主催者は、こども・若者の意見を聴く場を創出していく行政機関、特に地方自治体が想定されるが、講座開催に向けたサポートが必要である。まず、行政職員自身がこども意見ファシリテーターについて理解するため、こども意見ファシリテーターやモデルプログラムについての説明会のほか、こども家庭庁が実施する「いけんひろば」等の場でのファシリテーションを見学する機会を設けることや、行政職員向けに養成講座をこども家庭庁や都道府県等が開催することにより、行政職員自らファシリテーターになることが考えられる。

また、講座開催に必要な講師役のファシリテーターやサブ講師の紹介・派遣や費用の補助も講座主催者から求められると考えられる。講師役は本事業でも今後の展開に向けた課題として指摘を受けた点であり、講師をできる人材を増やしていくことも求められる。

主催者を面的に増やすには職域アプローチが求められる。例えば厚生労働省が養成する認知症サポーターは、2005年から18年間で1,500万人（令和5年12月時点）を超えている。認知症サポーターの場合は、全国の地方自治体と全国規模の企業・団体が共催して講師役を養成し、地域、職域、学校で養成講座を開催している。こども意見ファシリテーターの場合は、地方自治体（職員向け）や児童館（児童館職員向け）、大学（大学職員や大学生向け）がファシリテーター養成講座を主催することで、すそ野を広げることが考えられる。職域単位で講座を主催する仕組みづくりとサポートが求めら

れる。

図表 7-2 全国的にこども意見ファシリテーターを養成するステップイメージ



ファシリテーター養成プログラム作成のための調査研究

報告書

令和6（2024）年3月

株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所